

# 漢代辟召制の確立

西 川 利 文

## はじめに

漢代の官吏登用法（以下、登用法と略す）は、前漢文帝の二年（前一七八）における賢良方正の察舉を端緒とし、武帝の元光元年（前一三四）における孝廉察舉の開始をもって本格的に始動し、これ以後、さまざまな察舉科目が加わって、前漢時代には一應一つの登用法としての體系を現出する。そして後漢時代においても、基本的には前漢時代に成立した登用法體系を踏襲して官僚の登用が行われ、周知の如く孝廉がその主流となってくるのである。<sup>①</sup>

ところで、後漢時代になると辟召制が、孝廉と並んで盛んに行われるようになり、新たな登用経路として登用法體系の一角に割り込んできて、その中に大きな位置を占めるようになるのである。このように後漢時代に盛んに行われるようになる辟召制については、最初に辟召制を本格的に研究した五井直弘氏<sup>②</sup>をはじめとして、矢野主税<sup>③</sup>・鈴木啓造<sup>④</sup>・福井重雅<sup>⑤</sup>各氏による專論があり、さらに登用法體系全體の中で辟召制を取り扱った永田英正<sup>⑥</sup>・黃留珠<sup>⑦</sup>各氏の研究も見逃すことはできない。

これら先學諸氏による辟召制に関する研究によって、辟召制の制度的實態はかなりの部分が明らかにされてきた

が、必ずしも完全に解明されたとはいえずいさか疑問の餘地の残る點もある。その最大の點は、最も基本的な部分であるところの「辟召制とは一體いかなる制度なのか」ということが、未だ十分には明らかにされていないと思われることである。つまり、辟召制は後漢時代に登用法と密接な關係を持つようにはなるが、それが果たして純然たる登用法とみなせるか否かという點が明確にとらえられないままに、議論が展開されていると思われるのである。次の點は、後漢時代に何故辟召制が盛んに行われるようになったのかという、「辟召制盛行の要因を一體どこに求めるのか」ということである。從來この點について、五井氏は豪族彈壓政策の終息に伴う豪族勢力の伸長によるとみなし、また永田氏は孝廉のいきづまりによるとみなしているのである。しかし兩氏の見解は、辟召制の制度内容それ自體からではなく外的要因によって説明しようとしたものであり、私は兩氏の見解のどちらにも直ちに從うことはできない。そして辟召制盛行の要因は、まずその制度自體の變質・發展という面から検討していくべきであると考えてゐる。

私は先年後漢時代の登用法に關する拙論を發表し、この時代に特徴的に見られる登用拒否の現象を基軸として各登用法の性格について新たな一面を探り出そうと試み、その中で辟召制についても不十分ながら私見を示しておいたが、この私の辟召制理解に對して、福井氏から「辟召の概念が曖昧」であるとの批判をうけた。確かに私の行論の中にも不十分な點がなかったわけでもないが、改めて史書を読み返してみると、從來の辟召制理解にも右のような不十分な點が見られるのである。それは、從來のほとんどの研究が、前漢時代の辟召制についての具體的な考察を十分にしていないうことによるものと考えてゐる。そこで右に擧げた二つの問題點を中心として、前漢時代のことも視野にいれながら、前の拙稿で十分に論述しきれなかつた辟召制理解について述べていくことにしよう。

## 一、漢代辟召制の基本概念

### (一) 登用法と辟召制

漢代の辟召制とはどのような制度であり、登用法とどのような關連をもつのであろうか。この點については、五井氏は「徵召や辟召はこのようないわば公的な選舉制とはかなり趣を異にしている」<sup>④</sup>と、辟召制が登用法とは異なる性格の制度であるとしているものの、具體的な制度内容の相違點については述べておらず、その表題からすると、辟召制と登用法との相違點を認めつつもなお辟召制を一種の登用法としているようである。そしてこれ以後の研究においても、この點についての十分な検討がなされないままに、辟召制を漠然と登用法の一種とらえている感があるが、この點を確認しておかなければ、辟召制が本來的にもつ制度内容を見誤るおそれがある。また、從來の研究の中から辟召制と登用法の制度的相違點を明らかにできなくもないのである。そこで、登用法とはどのような制度を指し、辟召制がこれとどのような關係にあるのかということについて、從來の説を整理して簡単に述べておこう。

まず、登用法の内容については以下のようになる。漢代では、官吏の地位の上下は官秩によって定められ、その官秩は石數によって表されており、官吏は原則的に功勞（＝功績と勤務日數）によって低い地位から高い地位へと昇進していった<sup>⑤</sup>。しかし、全て功勞のみによって下級屬吏層から高級官僚へと昇進していくわけにはいかず、中央官廳や地方州郡縣の百石以下の屬吏層が二百石以上の官僚へ昇進する場合、そこには越え難い一線があり、その時に適用されるのが登用法なのである。そしてもちろん、在野無官の知識人が直接二百石以上の官僚に登用される場合もあったから、正確にいうと漢代の登用法とは、百石以下の屬吏層及び在野無官の知識人が二百石以上の官僚に登用される場合に適用される制度を指すのである<sup>⑥</sup>。このような内容をもつ漢代の登用法は一般に鄉舉里選あるいは選舉と呼ばれ、

その代表的なものとして、定期的に行われる孝廉や博士弟子、不定期的に行われる賢良方正などがあつたことは周知の如くである。<sup>④</sup>ここで登用法の特徴を一言でいえば、屬吏<sup>⑤</sup>から官僚へ昇進する場合に適用されるのが登用法であるということになる。

次に後漢時代の辟召制についての一般的な制度内容について述べておくと、それには大きく分けて廣義と狹義の二つの内容がある。廣義の辟召制とは、中央や地方の各官廳の長官が自己の屬吏をその長官自身が自由に任用する制度をいう。一方、狹義の辟召制とは、三公（太尉・司徒・司空）・太傅・大將軍など、いわゆる公府の長官に限定した屬吏任用の制度をいうのであって、後漢時代に登用法と密接な關連をもつようになるのは、改めていうまでもなくこの狹義の辟召制である。<sup>⑥</sup>しかし廣義・狹義いずれの場合も辟召制とは、官僚へ昇進する以前の屬吏を任用する制度なのであり、それは中央政府から認められた公式の制度ではあるが、おのずから登用法とは異なる制度なのである。<sup>⑦</sup>

辟召制は、このように登用法とは性格を異にする制度であるが、その最大の制度的相違點は人事權の所在にあると考える。今回問題とする狹義の辟召制の場合を例にとると、『漢書』卷八一匡衡傳に、彼が大司馬車騎將軍領尙書事であつた史高に辟召された時のこととして、

長安令楊興說高曰、（中略）平原文學匡衡材智有餘、經學絕倫、但以無階朝廷、故隨蹀在遠方。將軍誠召置莫府、學士欽然歸仁、與參事議、觀其所有、貢之朝廷、必爲國器、以此顯示衆庶、名流於世。高然其言、辟衡爲議曹史、薦衡於上、上以爲郎中。

とあり、長安令であつた楊興の推薦によって、史高自らが匡衡を辟召し議曹史としたのである。また『後漢書』傳三一寒朗傳を見ると、

詔三府爲辟首、由是辟司徒府。

とあり、このように皇帝の命令によって公府に對して辟召すべき有爲の人材を指定する場合もあつたが、これはあく

までも政府が指定した人物を辟召するように公府に對して勸告しただけのもので、寒朗はたまたま司徒府に辟召されたが、この場合三府のいずれにも辟召する權限が與えられていたのである。一方登用法の場合、孝廉を例にとると、太守が自己の管轄する郡内から官僚候補者を孝廉として中央政府に察舉するが、その者を官僚として採用するか否かの決定は、中央政府によって行われ、不適當な人材を察舉した場合には「選舉不實」として太守が罰せられることもあったのである。すなわち、登用法の場合は人事權が中央政府にあったのに對し、辟召制の場合は、人事權が當該官廳の長官にあり、基本的には中央政府の承認や干渉をうけなかったのである。<sup>⑨</sup>そしてここに、辟召制で時として問題となる故吏關係が生ずることになる。

## (二) 辟召制に對する新たな視角

ところで、後漢時代に狹義の辟召制が何故登用法と密接な關連をもつようになるのかということが問題となろう。しかしはじめにも述べたように、從來の研究は、辟召制が盛んに行われるようになった後漢時代のことを中心に考察し、前漢時代の辟召制についてはほとんど考慮していないことによって、辟召制自體の制度内容の變質・發展という觀點を見落としていたのである。とすれば、この問題を解決するためには、辟召制に對する新たな視角が必要となる。そこで次に、最近福井氏が從來の辟召制研究を訂正し提出した見解を検討して、そこから辟召制理解に對する新たな視角を探っていくことにしよう。

福井氏は、官廳の長官ならばほとんどの者が辟召權を持っていたとする從來の解釋は誤りで、史書に見える多くの事例からすると、辟召制を意味する「辟」字が用いられるのは、常設官ではない太傅・大將軍を除くと三公と刺史（州牧）のみに限定されるから、辟召權をもつのはこれらの官僚に限られ、その他の官僚には辟召權が與えられていなかった、とするのである。そして何故このように三公・刺史のみが辟召權を持つのかといえ、氏によると、三

公・刺史（州牧）という官職の成立は前漢末の成帝期に求められ、しかも同じ時期から辟召の事例が史書に顯著に現われるようになるのであって、三公・刺史という官職と辟召制との間には密接な關連を見出すことができ、兩者はいずれもその典據を周代の古典に求めることができる、というのである。つまり氏は、辟召權が三公・刺史のみに限定される理由を前漢末における周制の復活という點に求めるのである。確かに「辟」字が用いられるのは、福井氏が圖表に擧げるように三公・刺史による辟召の記事のみであり、從來の研究で見落とされていた部分を実證したという點で氏の見解は説得力を持つといえよう。しかしよく考えてみると、氏の見解にも、次のような不可解な點がなくもない。

まず第一に、辟召制が各官廳の長官が自由に自己の屬吏を任用する制度であるとすれば、三公や刺史以外の長官は自身で屬吏を任用できなかったのであろうか。また、福井氏が辟召制成立の時期とする成帝期以前には、全ての長官が屬吏を任用することが不可能だったのだらうか。第二に、登用法と密接な關連を持つのは、前にも述べたように狹義の辟召制、いわゆる公府による辟召であるが、辟召權が三公・刺史のみに限られていたと解釋するならば、何故三公（公府）による辟召のみが登用法と密接な關連を持つようになるのだらうか。つまり、福井氏のように考えるならば、辟召權は三公・刺史といった少數の官僚のみに與えられる特權ということになるのであるから、本來特權の内容は同質であるはずなのではないだらうか。<sup>②</sup>

それでは、右のような問題點は果たしてどこから生まれてくるのであろうか。それは、福井氏が從來の辟召制研究の延長線上で問題を解決しようとした點にあると考える。すなわち、五井氏をはじめとする辟召制研究は、官廳（特に公府）の長官が自己の屬吏を任用する場合に「辟」字が用いられることから、これを辟召制と呼び、そしてこの「辟」字が用いられるようになった後漢時代を中心に専ら議論を展開しており、福井氏はこれをさらに嚴密にとらえようとしたのである。<sup>③</sup> 例えば史料に「州郡辟召」という表現が散見され、一般にはこれを州と郡の兩方がそれぞれ辟

召權を持っていたと解釋しているが、福井氏はこの解釋を批判し、史料に残る「辟」字を用いる事例から見ると実際には辟召權は州のみに限られており、郡國の守相が屬吏を任用する場合は、『後漢書』傳四一李恂傳等の記事から主に「請署」と表現されるのが通例であつたとするのである。

しかし、視角を變えて辟召制本來の制度内容を中心に見ると、それは官廳の長官が自己の屬吏を任用する制度である。とすれば、たとえ「辟」字がなくても手續きとして一般に辟召制と呼ばれる制度の内容と同一であれば、それを辟召制とみなして何ら差支えないと考えられる。つまり、州による場合は「辟召」といい、郡による場合は「請署」というとしても、結局それらは長官自身が自己の屬吏を任用することをいうのであつて、その内容には何ら差異がないのではないかと考えられるのである。そこで次に、「請署」とはどのような意味であるかを確認してみよう。

『漢書』卷五一路溫舒傳を見ると、

元鳳中、廷尉〔解〕光以治詔獄、請溫舒署。奏曹掾、守廷尉史。

とあるように、「請署」とは、屬吏に任用しようとする者に對して依頼して（「請」、これを屬吏として任用する（「署」ということであり、「請署」という場合も手續きとして辟召制と何ら變わらないことが明らかとなるう。そして「請署」という場合、これは一つの熟語ではなく「請」と「署」という二つの手續きを意味するのである。このことからすれば、本稿で問題とする公府による辟召についても、「請」や「署」という語がある場合もこれを辟召制と考へてもよさそうである。このことを確認するために、次に公府による辟召の場合で「辟」字と「請」「署」とが同一史料内で混同して用いられ、その内容から辟召制を意味すると思われる例を擧げておこう。まず『後漢書』傳一七郭丹傳に、

大司馬嚴尤請丹、辭病不就。（中略）〔建武〕十三年、大司馬吳漢辟舉高第。再遷并州牧。

とあり、また『漢書』卷七七孫寶傳に、

御史大夫張忠辟寶爲屬、欲令授子經、更爲除舍、設儲備。寶自劾去、忠固還之、心內不平。後署寶主簿。

とある。最初の郭丹の場合は、王莽期に大司馬の嚴尤による辟召を拒否し、のちに後漢に入って建武一三年（三七）に大司馬の吳漢から辟召されたと考えられ、次の孫寶の場合は、成帝期に御史大夫の張忠に辟召され、その後自ら御史大夫府を去ったのちに、再び同じ張忠に辟召されているのであるから、孫寶の場合の「辟」と「署」は全く同一の辟召制を指すものと考えられるのである。

さらに、辟召を意味する言葉として「辟除」という熟語があり、「除」の場合も辟召制を意味するものと思われるのである。例えば『漢書』卷八三朱博傳に、

成帝卽位、大將軍王鳳秉政、奏請陳威爲長史。威。蕭。育。朱。博。除。莫。府。屬。鳳甚奇之、舉博櫟陽令。

とあり、大將軍王鳳は長史となった陳威の推薦によって、蕭育・朱博を自己の莫府の屬に「除して」いるのである。これは、前に見た匡衡の場合と同様に、第三者の推薦によって公府の長官自らが屬吏を任用しているのであるから、「辟」とあっても「除」とあってもその手續きは全く同一なのであり、右の朱博の記事も辟召制とみなしてよいであろう。そして、前の「請」「署」の場合と同様に、「辟」と「除」が混同して用いられている例を挙げると、『漢書』卷七十二鮑宣傳に、

大司馬衛將軍王商辟宣、薦爲議郎、後以病去。哀帝初、大司馬何武除宣爲西曹掾、甚敬重焉。薦宣爲諫大夫。とあり、この例からすると「辟」と「除」はともに辟召制を意味するものと考えて間違いないまい。

以上のように、「辟」字以外の「請」「署」「除」という語がある場合も、形態として長官が屬吏を任用することを意味するものであれば、それは辟召制と見て何ら差支えないことが明らかとなるのである。このように辟召制に対する視角を少し變えて考えれば、辟召制に「辟」字が一般に用いられるようになるのは、改めていうまでもなく前漢末から後漢初においてであるが、この時點をもって辟召制がはじまったと考える必要もなくなり、辟召制は早くから



行われ、その場合「辟」字ではなく「請」「署」「除」などの語をもって表わしていたと考えられるのである。

ここで今まで述べてきた辟召制の基本概念を確認しておこう。第一に、辟召制とは、中央・地方の各官廳の長官が中央政府の承認や干渉をうけずに自己の屬吏を自由に任用できる制度をいい、登用法の場合と異なり人事權はあくまでも各官廳の長官にあったのである。第二に、後漢時代に一般的に「辟」字が用いられることからこれを辟召制と呼ぶが、手續きを中心に見ると、たとえ「辟」字がなくとも内容として屬吏を任用する制度であれば、これを辟召制と見て何ら差支えはないのであり、このように考えれば、辟召權は官廳の長官であれば誰でもその權限を有していたことになるのである。そして先學諸氏の辟召制理解に反省を加えるならば、從來の辟召制研究は、あまりにも「辟」字を重視しすぎて後漢時代の辟召制のみに目を奪われており、その結果、辟召制本來の制度内容についての具體的な確定の作業が見落とされていたように思われてならないのである。<sup>⑦</sup>

### (三) 辟召制と「辟」字の成立

視角を變えて手續きを中心として辟召制を見た場合、何も「辟」字にとられる必要はなくなったが、それでは何故「辟」字が前漢末から後漢初にかけての間に一般に用いられるようになり、それが三公や刺史による辟召の場合にのみ用いられるのであろうか。この問題を解決するためには、福井氏のように三公や刺史の成立の状況との關連で考えなければならぬが、氏のように周制の復活という點でとらえることには躊躇を覺えるのであり、三公・刺史といった官の成立の意味をもう一度考え直さなければならないのである。つまり、これらの官が成立したことによって辟召權が備わったのではなく、辟召によって充足しなければならぬ屬吏層が、それらの官のもとに成立したことによって辟召權が備わったのであるという點で考えなければならぬのである。その手がかりとなるのは、次に示す北軍中候の記事である。

『後漢書』志二百官志北軍中候の條に引く『漢官』を見ると、

員吏七人、候自得辟召。

とあり、北軍中候にも「辟召」權があつたのである。これについて福井氏は「例外」とするだけで詳細については觸れていないが、この事實は、氏のように辟召制を周制との關係ではとらえきれないことを意味するのである。そこで北軍中候成立の背景を見ると、光武帝の軍縮政策のもとにあつて前漢武帝期に創設された八校尉が、胡騎校尉を長水校尉に、虎賁校尉を射聲校尉にそれぞれ統合し、中壘校尉は廢止して、屯騎・越騎・步兵・長水・射聲の五校尉に再編成され、この五校尉の營を統括させるために北軍中候が設置されたのである。すなわち、北軍中候は後漢初期に新たに創設された官なのであり、七名の屬吏は、もちろんこれ以後に置かれたのである。そして刺史や三公についても、これと同様のことがいえるのである。

刺史は武帝の元封三年（前一〇八）に設置された官であるが、『太平御覽』卷二六三職官部に引く應劭の『漢官儀』を見ると、

元帝時、丞相于定國條州大小、爲設吏員治中・別駕・諸部從事。秩皆百石。

とあり、元帝の初めに當時丞相であつた于定國によつて、それまで屬吏を持たなかつた刺史に對して、治中・別駕・諸部從事といった屬吏を配置することが決定されているのである。すなわち、刺史は元帝期に至つて、辟召によつて人材を確保しなければならぬ一定數の屬吏を持つようになったのである。また三公の場合を見ると、三公制成立によつて、大司徒となる丞相や大司空となる御史大夫は早くから屬吏を持っていたようであるが、大司馬となる太尉の場合は少し事情が異なるのである。すなわち、『漢書』卷一九百官公卿表上を見ると、

太尉、秦官、金印紫綬、掌武事。武帝建元二年省。元狩四年、初置大司馬、以冠將軍之號。宣帝地節三年、置大司馬、不冠將軍、亦無印綬官屬。成帝綏和元年、初賜大司馬金印紫綬、置官屬、祿比丞相、去將軍。哀帝建平二

年、復去大司馬印綬、官屬、冠將軍如故。元壽二年、復賜大司馬印綬、置官屬、去將軍、位在司徒上。

とあり、太尉（大司馬）は、三公制が復活される成帝の綏和元年（前八）にはじめて屬吏を置くことになるのである。北軍中候の場合を手がかりとして、屬吏を任用する場合に「辟」字あるいは「辟召」の語が用いられる官について見てみると、三公の場合は太尉（大司馬）のみであったが、いずれの官も前漢末から後漢初期にかけて屬吏層を持つに至り、辟召權が備わった官なのである。そして辟召制に史料ではじめて「辟」字が用いられるのは、前に引いた「辟」〔匡〕衡爲議曹史」とある匡衡の例で、それは刺史に屬吏定員が設けられたのと同時期の元帝期のはじめにあたるのである。とすれば、元帝期頃より以後、特に新たに屬吏を持つようになった官には専ら「辟」字が用いられるようになり、それ以外の從來から屬吏を持っていた官による辟召の場合は、從來の「請」「署」「除」などの辟召制を表わす別の語が用いられたと考えられるのである。

ところで、前漢末から後漢初期に屬吏層を持つようになった官による辟召の場合のみに、何故「辟」字が用いられるようになるのであろうか。それは、この間に辟召制に何らかの制度的變化があったものと考えられる。そしてその制度的な變化というのは、辟召制に「辟」あるいは「辟召」の語を用いる全ての官ではなく、それは三公をはじめとする公府による辟召であると考えられるのである。つまり、公府の場合は、太尉（大司馬）のみが前漢末に屬吏を持つようになるものの、その他の以前から屬吏を持っていた丞相（大司徒）・御史大夫（大司空）、それに加えて常設官ではない大將軍や太傅といった官も含めて、後漢時代には全ての公府による辟召に對して「辟」字が一般的に用いられるようになるのである。そして辟召制に「辟」字を用いる三公・刺史・北軍中候の中で「辟」字と他の辟召制を意味する語が混同して用いられるのは、管見の及ぶかぎり、實は前に見た前漢末の公府による辟召の例のみなのである。とすれば、この頃から公府による辟召が次第に制度的に變質して、後漢時代に登用法と密接な關係を持つような形の辟召制となり、特に公府による辟召の場合は「辟」字を統一的に用いるようになったものと考えられるのである。こ

のように考えて大過なければ、辟召制に「辟」字を用いることが一般化してきた頃に新たに屬吏を持つようになった刺史や北軍中候といった官にも、辟召制を表わす言葉として「辟」字が用いられるものの、それらの官と「辟」字の關係は、直接にはほとんどないといっても過言ではないのであり、「辟」字の一般的使用というのは、公府による辟召に重點を置いて考えていかなければならない問題となるのである。そこでこれからは公府による辟召に問題をしばって、その制度自体では登用法とはいえない辟召制が、何故準登用法としての性格を帯びるようになるのかについて検討してみよう。以下特にことわらないかぎり、辟召制という場合は狹義の辟召制、すなわち公府による辟召を指すことにする。

#### (四) 公府による辟召

右に見たように前漢末に辟召制は制度的に變質・發展し、後漢時代に登用法と密接な關連を持ち盛んに行われるようになると考えられるが、辟召制が準登用法としての性格を帯びるようになる一つの要因として考えられるのは、公府の掾屬の秩の高さである。その秩は、掾で比四百石か比三百石、屬で比二百石であり、特に掾の場合は、登用法によつて官僚となつた者の一般的な初任官である郎官と同等の秩であつた。このような公府の掾屬の秩の高さは、『太平御覽』卷二〇九職官部に引く崔寔の『政論』に、

三公天子之股肱、掾屬則三公之喉舌。天子當恭己南面於三公、三公亦委策掾屬、以答天子。

とあるように、掾屬は公府の長官である三公の政治的ブレーンであり、政府の政策決定に重要な役割を擔うと考えられたことによるのである。そしてこのことは、辟召によつて公府の掾屬となれば、登用法によらず二百石の一線を越えることができたことを意味するのであり、ここに辟召制が登用法と密接な關連を持つようになる要因があつたのである。この點については、從來から指摘されてきたことではあるが、ここで見誤つてはいけなひのは、公府の掾屬は、

その地位の故に秩は高かったが、前に見たように彼らは身分的にはあくまでも公府の屬吏なのであって、正式に官僚となるためには、所屬の公府から改めて察舉されなければならなかったということである。<sup>9)</sup>

いま後漢時代の辟召制を例にとってみると、公府には不定期的な登用法である制科による察舉のほか、茂才・察廉・高第といった察舉權が與えられており、中でも高第による察舉というのは、『後漢書』志二百百官志御史中丞・侍御史の條の注に引く蔡質の『漢儀』に、

其二人更直。執法省中、皆糾察百官、督州郡。公法府掾屬高第補之。

とあるように、公府の掾屬が官僚に轉出していく主要なコースとして、すでに定制度化していたようである。そして『後漢書』傳一五魯恭傳には、

恭再在公位、選辟高第、至列卿郡守者數十人。

とあり、魯恭が、和帝末の永元一三―一六年（一〇一―一〇四）と安帝初の永初元―三年（一〇七―一〇九）の前後二度、五年間にわたる司徒在位期間中に、辟召して高第に察舉した者の中で數十人が九卿や郡太守といった高級官僚になっているのである。この魯恭の例からすれば、遅くとも後漢中期の和帝期には、公府によって高第による察舉が頻繁に行われていたことがわかるのである。つまり、後漢時代に公府による辟召から官僚となるコースが一般化してきたことから辟召制を一種の登用法とするならば、公府からの高第をはじめとする察舉というのは、掾屬が官僚となるためには必ず通らなければならない通過點なのであり、その制度自體ではあくまで屬吏を任用する制度であり登用法とはいえない辟召制が、「辟召↓（高第等による）察舉」という過程が確立したことによって登用法と密接な関連を持ち、準登用法としての地位を獲得するようになったものと考えられるのである。

## 二、前漢の辟召制

さて、「辟召」(高第等による)「察舉」という過程が成立し、辟召制が準登用法としての地位を獲得するのはいつごろのことであろうか。この点については、今回改めて視角を変えて辟召制について検討してみると、前に擧げたように前漢時代にも少なからず辟召制の存在が確認され、從來知られているよりも多くの者が公府に辟召されてから官僚となつてゐると豫想される。また「辟」字の登場が、辟召制の制度的變質と何らかの關係を持つてゐると思われることからすれば、當然前漢時代にまでさかのぼって辟召制を検討しなければならなう。そこで、前漢時代に公府によつて辟召された例を時期順にその史料の根據とともに次に表一として掲げ、これによつて、公府に辟召された者がどのような経路をたどつてどのような官に就いたのかを検討し、前漢辟召制の特徵を考えてみよう。

表一 前漢被辟召者一覽

| 5                     | 4                   | 3                           | 2                     | 1  | No          |
|-----------------------|---------------------|-----------------------------|-----------------------|--|-------------|
| 〃                     | 〃                   | 昭                           | 武                     | 景  | 時期          |
| 田延年                   | 楊敞                  | 蔡義                          | 兒寬                    | 趙禹   | 姓名          |
|                       |                     |                             | 廷尉奏<br>議掾             | 中都官<br>佐史  | 辟召前<br>の地位  |
| 大將軍                   | 大將軍                 | 大將軍                         | 御史大夫                  | 太尉<br>丞掾↓  | 辟召者         |
|                       |                     |                             | 掾                     | 令史↓史   | 辟召後<br>の地位  |
|                       |                     |                             | 舉                     |  | 察舉科目        |
| 大將軍<br>長史             | 軍司馬                 | 門候                          | 侍御史                   | 御史   | 察舉直後<br>の官位 |
| 90                    | 66                  | 66                          | 58                    | 90   | 出典          |
| 以材略給事大將軍莫府。霍光重之、遷爲長史。 | 給事大將軍莫府。爲軍司馬、霍光愛厚之。 | 以明經給事大將軍莫府。（中略）數歲、遷補府覆盎城門候。 | 及〔張〕湯爲御史大夫、以寬爲掾、舉侍御史。 | 以佐史補中都官、用廉爲令史、事太尉周亞夫。亞夫爲丞相、禹爲丞相史。（中略）武帝時、禹以刀筆吏績勞、遷爲御史。 | 史料          |

|          |                        |                   |  |                                  |   |  |             |  |   |   |                                     |
|----------|------------------------|-------------------|--|----------------------------------|---|--|-------------|--|---|---|-------------------------------------|
| 17       | 16                     | 15                | 14                                       | 13                               | 12  | 11                                       | 10          | 9  | 8   | 7   | 6                                   |
| 〃        | 〃                      | 成                 | 〃  | 〃                                | 元   | 〃  | 〃           | 〃  | 〃   | 宣   | 〃                                   |
| 卓茂       | 蕭由                     | 蕭咸                | 谷永                                       | 諸葛豐                              | 匡衡  | 孟喜                                       | 〃           | 嚴延年  | 蕭望之   | 薛廣德   | 嚴延年                                 |
|          |                        |                   | 縣吏                                       | 郡文學                              | 郡文學   | (免官)                                     | (去官)        | (逃亡)   | 郡吏  |   | 郡吏                                  |
| 丞相       | 丞將軍                    | 丞相                | 御史大夫                                     | 御史大夫                             | 大司馬車騎將軍   | 丞相                                       | 御史大夫        | 御史大夫   | 御史大夫  | 御史大夫  | 御史大夫                                |
| 史        | 西掾                     | 史                 | 屬  | 屬                                | 議曹史   | 掾  | 掾           | 掾  | 屬   | 屬   | 掾                                   |
| 舉        |                        | 茂材 <sup>[才]</sup> | 舉  | 舉                                | 薦   | (薦)                                      | 擢           | 拜  | 察廉  | 薦   | 舉                                   |
| 侍郎       | 謁者                     | 縣令                | 太常丞                                      | 侍御史                              | 郎中  | (不用)                                     | 縣令          | 縣令   | 禮丞  | 博士  | 侍御史                                 |
| 傳15      | 78                     | 78                | 85                                       | 77                               | 81  | 88                                       | 〃           | 90   | 78  | 71  | 90                                  |
| 侍郎、給事黃門。 | 爲丞相西曹・衛將軍掾、遷謁者、使匈奴副校尉。 | 爲丞相史、舉茂材、爲好時令。    | 少爲長安小史、後博學經書。建昭中、御史大夫繁延壽聞其有茂材、除補屬、舉爲太常丞。 | 以明經爲郡文學、名特立剛直。貢禹爲御史大夫、除豐爲屬、舉侍御史。 | 射策甲科、以不應令除爲太常掌故、調補平原文學。(中略)會宣帝崩、元帝初卽位。(中略)〔大司馬車騎將軍史高〕辟衡爲議曹史、薦衡於上、上以爲郎中。 | 舉孝廉爲郎、曲臺署長、病免。爲丞相掾。博士缺、衆人薦喜。上聞喜改師法、遂不用喜。 | 爲丞相掾、復擢好時令。 | 會赦出、丞相・御史府徵書同日到、延年以御史書先至、詣御史府、復爲掾。宣帝識之、拜爲平陵令、坐殺不辜、去官。後 | 望射策甲科爲郎、署小苑東門候。(中略)免歸爲郡吏。及御史大夫魏相除望之爲屬、察廉爲大行治禮丞。 | 以魯詩教授楚國。(中略)蕭望之爲御史大夫、除廣德爲屬。數與論議、器之、薦廣德經行宜充本朝、爲博士、論石渠。 | 少學法律丞相府、歸爲郡吏。以選除補御史掾、舉侍御史。(中略)延年亡命。 |

|        |  |  |   |   |   |   |   |                                |   |   |
|--------|--|--|---|---|---|---|---|--------------------------------|---|---|
| 28     | 27   | 26                                     | 25  | 24  | 23  | 22  | 21  | 20                             | 19  | 18  |
| 〃      | 〃  | 前漢末                                    | 〃   | 〃   | 〃   | 〃   | 〃   | 〃                              | 〃   | 〃   |
| 陳遵     | 鄭崇   | 〃                                      | 鮑宣  | 杜鄴  | 蕭育  | 朱博  | 揚雄  | 何並                             | 李尋  | 孫寶  |
| 京兆史    | 郡吏   | (去官)                                   | 州從事   | (去官)  | 御史  | 郡功曹   |   | 郡吏                             |   | 郡吏  |
| 公府     | 丞相   | 大司空                                    | 大司馬衛將軍  | 大司馬衛將軍                                      | 大將軍   | 大將軍   | 大司馬車騎將軍   | 大司空                            | 丞相  | 御史大夫  |
|        | 大車屬  | 西曹掾                                    |   | 主簿  | 功曹  | 屬   | 門下史   | 掾                              | 吏   | 主簿  |
| 能治三輔劇縣 | 薦  | 薦                                      | 薦   | 舉   |   | 舉   | 薦   | 能治劇                            | 薦   | 薦   |
| 縣令     | 尙書僕射   | 諫大夫                                    | 議郎  | 侍御史   | 謁者  | 縣令  | 待詔  | 縣令                             | 門待詔黃  | 議郎  |
| 92     | 77   | 〃                                      | 72  | 85  | 78  | 83  | 87  | 77                             | 75  | 77  |
| 令。     | 與張竦伯松俱爲京兆史。哀帝之末俱著名字、爲後進冠、並入公府。(中略)(大司徒馬宮)乃舉遵能治三輔劇縣、補都夷 | 少爲郡文學史。至丞相大車屬。(中略)(傳)喜爲大司馬爲崇、哀帝擢爲尙書僕射。 | 舉孝廉爲郎、病去官、復爲州從事。大司馬衛將軍王商辟宣、薦爲議郎。後以病去。哀帝初、大司空何武除宣爲西曹掾、甚敬重焉、薦宣爲諫大夫。 | 以孝廉爲郎。(中略)後以病去郎。(王)商爲大司馬衛將軍、除鄴主簿、以爲腹心、舉侍御史。 | 元帝卽位、爲郎。病免、後爲御史。大將軍王鳳以育名父子、著材能、除爲功曹。遷謁者、使匈奴副校尉。 | 爲郡功曹。久之、成帝卽位、大將軍王鳳秉政、奏請陳威爲長史。威薦蕭育、朱博、除莫府屬。鳳甚奇之、舉博樂陽令。 | 自蜀來至游京師。大司馬車騎將軍王音奇其文雅、召以爲門下史、薦雄待詔。歲餘、奏羽獵賦、除爲郎、給事黃門。 | 爲郡吏。至大司空掾、事何武。武高其志節、舉能治劇、爲長陵令。 | 帝舅曲陽侯王根爲大司馬票騎將軍、厚遇尋。(中略)根於是薦尋。哀帝初卽位、召尋待詔黃門。 | 以明經爲郡吏。御史大夫張忠辟寶爲屬。(中略)寶自劾去。(中略)後署寶主簿。(中略)上書薦寶經明質直、宜備近臣、爲議郎。 |



|    |     |              |     |     |       |      |  |
|----|-----|--------------|-----|-----|-------|------|--|
| 29 | 任文公 | 州治中從事        | 司空  | 掾   | (歸家)  | 傳72上 | 爲治中從事。(中略)辟司空掾。平帝即位、稱疾歸家。                        |
| 30 | 郭伋  |              | 大司空 |     | 郡都尉   | 傳21  | 哀平間、辟大司空府。三遷爲滎陽都尉。                               |
| 31 | 云敞  | 大司徒↓<br>車騎將軍 | 掾↓掾 | 薦   | 中郎諫大夫 | 67   | 時爲大司徒掾、自劾吳章弟子。(中略)車騎將軍王舜高其志節、比之樂布、表奏以爲掾、薦爲中郎諫大夫。 |
| 32 | 宣秉  | (不仕)         | 宰衡  |     | (不應)  | 傳17  | 州郡連召、常稱疾不仕。王莽爲宰衡、辟命不應。                           |
| 33 | 隗囂  | 州郡吏          | 國師  | 士   | (歸鄉里) | 傳3   | 少仕州郡。王莽國師劉歆引囂爲士。歆死、囂歸鄉里。                         |
| 34 | 范升  |              | 大司空 | 議曹史 | (逃亡)  | 傳26  | 王莽大司空王邑辟升爲議曹史。(中略)升稱病乞身、邑不聽、令乘傳使上黨。升遂與漢兵會、因留不還。  |
| 35 | 向長  | (不仕)         | 大司空 |     | (不應)  | 傳73  | 王莽大司空王邑辟之、連年乃至、欲薦之於莽、固辭乃止。                       |
| 36 | 郭丹  |              | 大司馬 |     | (不就)  | 傳17  | 常爲都講、諸儒咸敬重之。大司馬嚴尤請丹、辭病不就。                        |
| 37 | 杜詩  | 郡功曹          | 大司馬 |     | 侍御史   | 傳21  | 仕郡功曹、有公平稱。更始時、辟大司馬府。建武元年、歲中三遷爲侍御史。               |
| 38 | 李章  | 州郡吏          | 大司馬 | 東曹屬 | 拜縣令   | 傳67  | 歷州郡吏。光武爲大司馬、平定河北、召章置東曹屬、數從征伐。光武即位、拜陽平令。          |

\* 出典の欄で、數字だけのものは『漢書』、傳が付くものは『後漢書』である。

表一に示したように、同一人物が數回にわたって辟召された例をそれぞれ一度と數えると、前漢時代に公府に辟召された者は延べ三八名となり、その中で辟召に應じなかったりあるいは辟召に應じながら結局就官しなかった七名を除く三一名が、辟召されてから就官している。また時期的に見ると、最も早い辟召の事例は景帝期に太尉周亞夫に辟

召された趙禹であり、これ以後、昭帝期頃から辟召制の事例が少なからず見られるようになり、辟召制に「辟」字が次第に用いられるようになる成帝期以後急に辟召制の事例が増えてくる。このように、前漢時代においても辟召制の事例が相當數確認され、しかも時期的に早くから見られるのである。しかしここで注意しなければならないことは、最初に確認できる景帝期の辟召制の事例をもって、辟召制の開始とするのではないということである。つまり、史料に残る辟召制の最初の事例が景帝期なのであって、公府にも早くから屬吏が存在していたと考えられることからすれば、辟召制自體は少なくとも前漢成立當初にはすでに存在していたものと考えられるのである。これらのことは、辟召制は前漢末にはじまり後漢時代に入って盛んに行われるようになるとする従來の考え方を、改めなければならないことを意味するのである。

辟召制は本來屬吏を任用するための制度であるが、遅くとも後漢時代には「辟召↓（高第等による）察舉」という経路ができあがっていたことによって、登用法に準ずるような制度として登用法體系の一角に割り込んでくるのである。とすれば、前漢時代の辟召制にも後漢時代のそれと同様の経路が備わっていれば、それは準登用法として確立していたと見てもよいであろう。そこで表Ⅰを見ると、察舉科目の欄に示したように茂材（茂才）や能治劇あるいは察廉といった具體的な察舉名があるものと、「舉」の一字によって察舉を意味しているものとがある。これらはいずれも察舉を意味することは明白であるが、さらに察舉科目の欄に「薦」とあるものがある。これは、官僚による皇帝への人材の推薦を意味し、結果としては皇帝自らが官僚を登用する徵召を意味するものであり、察舉權は皇帝に存在することになるが、徵召の前提に官僚による推薦があることは、これを實質的な察舉と見てもよいであろう。そして表Ⅰの察舉科目の欄の「拜」とか「擢」というのも皇帝による徵召を意味する語であるから、その前提として官僚による推薦が想定され、これらも「薦」と同じ範疇に入ることになる。このように、「舉」という直接察舉を意味する語があり、また「薦」も實質的には公府に察舉權があったとすれば、前漢時代の辟召制も「辟召↓察舉」という経路を

とっていることになり、後漢時代の辟召制と同じく準登用法としての性格を既に備えていたといえるようである。そしてその最も早い例は、御史大夫府に辟召されて侍御史に察舉された兒寛（No. 2）で、それは武帝期のことであり、遅くともこの頃には「辟召↓察舉」という経路はできあがっていたと考えられるのである。<sup>⑧</sup>

ところが、前漢時代の察舉科目には、後漢時代に一般的に見られる高第による察舉の例が見當らない。ただ、「舉侍御史」と記されている者が四名（嚴延年・諸葛豐・兒寛・杜鄴）おり、後漢の例から考えると、あるいは彼らは高第に察舉されて侍御史に就官したのかもしれないが、高第という語は前漢時代にも存在し、公府の辟召以外のあらゆるレベルでの察舉の場合に用いられていることからすれば、前漢時代の辟召制の場合、公府に察舉權は認められているものの、高第という察舉科目は存在しなかったと考えてよいであろう。そして「舉」の場合、その多くが「舉」とのみあり具體的な察舉科目を舉げていないことからすれば、その察舉權というのは恒常的なものとはなっておらず、また具體的に察舉科目名が擧げである茂材・察廉・治劇についても、それらの察舉權も不定期的なものであったと考えられる。<sup>⑨</sup>そして「薦」の場合は、公府の長官が随時に所屬の掾屬を推薦して皇帝による徵召を待たなければならぬのであり、その察舉權というものも不安定なものであった。このように、前漢時代においても公府には察舉權があったものの、それは不安定なものであり、後漢時代に盛んに行われる高第による察舉が存在しなかったことは、前漢辟召制の一つの特徴であるといえるであろうが、詳細については次節に譲ることにしよう。

さて、一般の登用法では、孝廉に察舉された者はまず比三百石の郎中に就官するというように、察舉後の初任官はある程度一定していたようであるが、「辟召↓察舉」という過程を経て準登用法としての性格を持つようになった辟召制の初任官についても同様のことが見出せるであろうか。そこで、公府に辟召されてから就官した者（三一名）の中で、公府から察舉された直後に就官して、その初任官が判明する二三名の例をもとにして、彼らがまずどのような官に就くのかを見てみよう。

表一を見つると、初任官は一定していないようであるが、ある程度の法則性が見出せるのである。すなわち、その初任官が縣令である者が七名と最も多く、しかもその縣はほとんど三輔の縣なのである。④そして、御史大夫に屬する御史の一種である侍御史に就いた者がそれに續き、またわずかに一名であるが博士に就官した者もいる。このことによつて思い出されるのが、『藝文類聚』卷四五職官部に引く衛宏の『漢舊儀』にある丞相による辟召に對してその基準を設けた、いわゆる「四科之辟」である。そこには、

古法、雖聖猶試。故令丞相設四科之辟、以博異德。第一科曰、德行高妙、志節清白。二科曰、學道修行、經中博士。三科曰、明曉法令、足以決疑、能案章覆問、文中御史。四科曰、剛毅多略、遭事不惑、明足以照姦、勇足以決斷、才任三輔劇令。皆試以其能、然後官之。

とある。この「四科之辟」は、これらの基準によつて辟召し、試験をしたのちにそれぞれ適當な掾屬に配置することゝ定めたものであり、さらに右の一文に續いて一科から四科までそれぞれの配置されるべき掾屬の名を擧げているから、これはあくまでも辟召する基準を定めたものにすぎない。

しかしこの基準を見ると、第一科は具體的な官名を記していないが、第二科は儒學の能力が博士に相當する者、第三科は法律に關する知識が御史に相當する者、第四科は三輔の難治の縣令を務め得る者と、それぞれ具體的な官名を記しているのである。そして、恐らくこの「四科之辟」の基準によつて辟召されたであろう者の多くが、實際にその基準で具體的に記した官に就いているのである。このことからすれば、「四科之辟」は、あくまでも辟召する基準であるものの、そこに具體的な官名を記していることから、將來その官に就くにふさわしい人材を辟召せよということ述べたものであり、逆にいえば、公府に辟召されれば、將來博士・侍御史・三輔の縣令に就くことができることをある程度保證したものであるであらう。そしてこれらの官の秩を見ると、博士・侍御史は六百石の官であつて、縣令は千石から六百石の官で、中でも三輔の縣令ともなれば最も高い秩の千石であつたと思われる。また、右の三つの

官以外を初任官とする者のその就いた官の秩を見ると、比六百石の議郎（孫寶・鮑宣）を最下の秩として、ほとんどの者がそれ以上の秩の官に就いているのである。すなわち、公府に辟召されて察舉された者の初任官は、一般に千石以下比六百石以上の官であったといえるのであり、「辟召↓察舉」という過程を経ることによって準登用法的な性格を帯びた辟召制を一種の登用法とみるならば、それは比三百石の郎中を初任官とする孝廉よりも一段上位の登用法であり、六百石以上の官を初任官とする徵召や制科と同じ範疇に入る登用法であるといえるのである。

### 三、後漢時代の辟召制

#### （一）高第による察舉の定着

視角を變えて改めて辟召制を考えてみると、前節で見たように前漢時代にも公府による辟召は盛んに行われ、しかも「辟召↓察舉」という準登用法としての形態をすでに備えていたことが明らかとなった。これは、従来の辟召制理解に再検討を迫るものである。

ところで、辟召制は後漢時代になってはじめて盛んに行われるようになるとする考え方は古くからあったようで、例えば馬端臨は『文獻通考』卷三九選舉考の中で、

蓋東漢時、選舉辟召皆可以入仕。以鄉舉里選、循序而進者、選舉也。以高才重名、躡等而升者、辟召也。

といって、後漢時代には登用法（選舉）と並んで辟召制が重要な官僚の登用経路であったことを述べており、また徐天麟は『西漢會要』で設けていない辟召制についての項を、『東漢會要』では「公府辟除」「州郡辟除」（いずれも卷二七選舉下）として設けているのである。このように古くから辟召制は後漢時代になってはじめて行われるようになったものとして認識されるのは、従来の研究と同様に、この頃から辟召制に「辟」字が専ら用いられるようになった

ったためと考えられる。表Ⅰを見てもわかるように、確かに「辟」字の登場とともに辟召制の例は成帝期以後急に増えるのであり、従来からいわれるように「辟」字の成立によって、後漢時代に公府による辟召が孝廉と並ぶほど盛んに行われ、登用法體系の一角に割り込んでくるのである。しかし、「辟」字の成立以前にも辟召制は行われていることからすれば、その背後に、辟召制が制度的に確立し、後漢時代に前代にもまして盛んに行われるようになる要因があるものと考えられるのである。

具體的に前漢時代の辟召制を検討してみると、前漢時代にも辟召制は「辟召↓察舉」という準登用法としての形態を備えていたものの、そこには、前の魯恭傳の記事に見えるように後漢時代では頻繁に行われる高第による察舉が存在しなかったようなのである。とすれば、辟召制の變質・發展というのは、前漢末における「辟」字の成立とともに後漢時代における高第による察舉の定着と何らかの關係があるものと考えられ、事實『後漢書』によって辟召制の例を拾い出し、公府に辟召された者がどのような察舉科目によって察舉されているかを見ると、前漢時代には見られなかった「舉高第」という高第に察舉された例が多く目につくのである。それでは、この高第による察舉は後漢時代のいつ頃からはじまり、また高第という察舉科目によってどれほどの者が察舉されているのか、ということを確認してみよう。

まず次頁に掲げた表Ⅱは、公府に辟召されて就官した者の察舉科目の一覽である。これを見ると、後漢時代においても察舉科目としては、前漢時代の辟召制と同様に薦・徵といった公府の長官が皇帝に直接掾屬を推薦して官に就ける場合や、あるいは茂才や治劇・制科によって察舉する場合もあったが、察舉科目が不明な者を除くと、高第に察舉されている者が最も多くなり、しかも後漢初期の光武帝期から高第による察舉例が見られるのである。それでは、何故後漢時代になるとこのように高第による察舉例が多くなるのであろうか。私はこれを、公府が毎年一定数の掾屬を高第によって察舉するという、公府に對する定期的な察舉權の確立という點に求めるのである。これを裏付ける史料

表Ⅱ 被辟召者察舉科目一覽

| 時 期                             | 被辟召者 | 高 第 | 茂 才 | 治 劇 | 制 科 | 薦・徵 | その他 | 不 明 |
|---------------------------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 前 漢                             | 21   | 0   |     | 2   | 1   | 12  | 0   | 6   |
| 光 武<br>明 章<br>和 安<br>順 桓<br>靈 獻 | 12   | 2   | 0   | 1   | 0   | 5   | 1   | 3   |
|                                 | 11   | 0   | 1   | 1   | 0   | 2   | 0   | 7   |
|                                 | 5    | 1   | 0   | 0   | 1   | 0   | 0   | 3   |
|                                 | 4    | 2   | 1   | 0   | 0   | 0   | 0   | 1   |
|                                 | 14   | 1   | 2   | 1   | 0   | 4   | 1   | 5   |
|                                 | 9    | 5   | 2   | 0   | 0   | 1   | 0   | 1   |
|                                 | 17   | 4   | 0   | 3   | 0   | 2   | 1   | 6   |
|                                 | 28   | 12  | 1   | 0   | 0   | 2   | 1   | 12  |
|                                 | 43   | 5   | 1   | 0   | 0   | 4   | 4   | 29  |
| 後漢合計                            | 143  | 32  | 8   | 6   | 1   | 20  | 8   | 67  |

として、『後漢書』傳二四梁冀傳に、

建和元年、益封冀萬三千戶、增大將軍府舉高第・茂才、官屬倍於三公。

という記事がある。これによると、桓帝即位の翌年の建和元年（一四七）に當時大將軍であつた梁冀に對して、一萬三千戶の益封及び大將軍府の官屬定員を三公府の二倍にすることと並んで、高第・茂才の察舉數を増すことが決定されているのである。茂才は光武帝の時に定期的に察舉するようになっており、それと並んで高第の察舉數を増やしたのであるから、後漢後期の桓帝期にはすでに高第にも察舉定員があつたことを前提としなければならないであらう。とすれば前に見た魯恭の場合も、彼が五年間の司徒在位期間中に相當數の者を高第に察舉しているのであるから、當時すでに毎年一定數の掾屬を高第によつて察舉する察舉定員があつたと見てよさそうである。

ところで、前に示した蔡質の『漢儀』によると、公府に辟召されて高第に察舉されると侍御史に就くのが一般的であつたようであるが、果たしてこれが實例に照らしてみても裏付けられるかどうかを確かめてみよう。それは、高第に察舉されて侍御史に就くのが一般的になつてくる頃から、高第が定期的な察舉科目となると考えられるからである。そこで次に、高第に察舉された者がいかなる官にまず就くのかを

表Ⅲ 後漢舉高第者就官一覧

| 時 期 | 人数 | 侍御史 | 縣令 | 博士 | その他 | 不明 |
|-----|----|-----|----|----|-----|----|
| 光 武 | 2  | 0   | 0  | 0  | 0   | 2  |
| 明   | 0  | 0   | 0  | 0  | 0   | 0  |
| 章   | 1  | 1   | 0  | 0  | 0   | 0  |
| 和   | 2  | 0   | 0  | 0  | 2   | 0  |
| 安   | 1  | 1   | 0  | 0  | 0   | 0  |
| 順   | 5  | 4   | 0  | 0  | 0   | 1  |
| 桓   | 4  | 2   | 0  | 0  | 0   | 2  |
| 靈   | 12 | 4   | 0  | 0  | 4   | 4  |
| 獻   | 5  | 4   | 0  | 0  | 1   | 0  |
| 合 計 | 32 | 16  | 0  | 0  | 7   | 9  |

見るために、表Ⅲとしてその状況を掲げておこう。なお、表Ⅲに挙げた具體的な官名は、侍御史をはじめとして、いずれも前の「四科之辟」にある官名である。

表Ⅲに見える通り、初任官が不明な者を除くと、高第に察舉された者の初任官は大半が侍御史であり、これによって蔡質の『漢儀』に記されていることがほぼ裏付けられるのであって、遅くとも章帝期頃からは、「辟召↓舉高第↓侍御史」というコースが確立していたと見てもよいであろう。そしてこれだけの確率で高第に察舉されていることからすれば、初任官が不明な者についても、その初任官は多くは侍御史であったとも考えられるのであり、光武帝期の初任官の不明な二名についても、その初任官はあるいは侍御史だったのではないかと推測できるのである。とすれば、「辟召↓舉高第↓侍御史」というコースは、後漢初期の光武

帝の頃から成立していたものと考えられるのであって、高第による察舉が定期的なものとなるのもこの頃と考えてもよいであろう。

以上のように公府に高第や茂才によって毎年一定数の掾屬を察舉することが認められ、しかも高第による察舉は毎年相當數にのぼったということは、辟召制の制度内容に重要な意味を持つのである。

前漢時代の辟召制は、皇帝への推薦や治劇・制科などによって察舉することが認められてはいたが、それは定期的な一定数の掾屬を官僚として察舉するものではなかった。それが後漢時代になると、高第・茂才によって毎年一定数の掾屬を察舉することが保證されるようになり、しかも表Ⅱを見てもわかるように、その他に掾屬を直接皇帝へ推薦



することなども可能なのであった。すなわち、後漢時代になると「辟召↓（高第等による）察舉」という準登用法としての辟召制が、前漢時代からの不安定な察舉科目を残しつつも、定期的な高第による察舉の定着によって、半ば定期的なものとなるのである。そして、高第に察舉されるとほぼ自動的に侍御史に就くというコースができあがってきただことよって、前代にもまして辟召制が登用法と密接な關連をもち、登用法體系の一角に割り込んでくるのである。ここに辟召制が、準登用法として地位を確立することになったと考えられるのである。

## （二）察舉後の初任官と昇進の速さ

さて、高第に察舉されると侍御史に就くのが一般的ではあったが、表Ⅲを見ると、侍御史以外の官についている例もある。まず和帝期の二名についてみると、

辟太傅張禹府、舉雄高第、除平氏長。（『後漢書』傳二八法雄傳）

及「寶」憲爲車騎將軍、辟駟爲掾。（中略）察駟高第、出爲長岑長。（『後漢書』傳四二崔駰傳）

とある法雄と崔駰で、二人はともに三百石ないし四百石の縣長に就官しているのである。次に靈帝期の四名について見ると、そのうち二名は、

辟公府、舉高第、拜議郎。（『後漢書』傳六九上張馴傳）

公府辟、舉高第、除太醫令。（『三國志』卷一一王脩傳の裴注所引脂習傳）

とある張馴と脂習であり、侍御史と同秩の六百石の議郎と太醫令に就官しており、残りの二名は、

辟公府、以高第拜騎都尉。（『三國志』卷七張邈傳）

とある比二千石の騎都尉に就いた張邈と、

辟司徒劉寵府、舉高第。九江山賊起、連月不解。三府上球有理姦才、拜九江太守。（『後漢書』傳六七陽球傳）

表Ⅳ 後漢被辟召者就官一覽

| 時 期                             | 人 數 | 侍御史 | 縣令 | 博士 | 議郎 | 六百石以上<br>千石以下 | 縣長 | 四百石以下 | 太守 | 二千石以上 | その他 | 不明 |
|---------------------------------|-----|-----|----|----|----|---------------|----|-------|----|-------|-----|----|
| 光 武<br>明 章<br>和 安<br>順 桓<br>靈 獻 | 12  | 1   | 1  | 2  | 1  | 2             | 1  | 1     | 0  | 0     | 0   | 3  |
|                                 | 11  | 0   | 0  | 0  | 1  | 2             | 0  | 0     | 0  | 0     | 0   | 8  |
|                                 | 5   | 2   | 1  | 0  | 0  | 0             | 0  | 0     | 0  | 0     | 0   | 2  |
|                                 | 4   | 0   | 0  | 0  | 0  | 0             | 2  | 1     | 0  | 0     | 0   | 1  |
|                                 | 14  | 2   | 2  | 0  | 1  | 0             | 1  | 3     | 1  | 0     | 0   | 4  |
|                                 | 9   | 5   | 1  | 0  | 0  | 0             | 0  | 0     | 0  | 0     | 0   | 3  |
|                                 | 17  | 2   | 3  | 0  | 0  | 2             | 3  | 0     | 0  | 0     | 0   | 7  |
|                                 | 28  | 5   | 4  | 0  | 2  | 4             | 1  | 0     | 1  | 3     | 1   | 7  |
|                                 | 43  | 4   | 14 | 0  | 1  | 8             | 2  | 2     | 5  | 4     | 3   | 0  |
| 合 計                             | 143 | 21  | 26 | 2  | 6  | 18            | 10 | 7     | 7  | 7     | 4   | 35 |

とある二千石の太守に就いた陽球である。そして獻帝期の一人は、  
 辟公府、舉高弟、遷任城相、不行。攸以蜀漢險固、人民殷盛、乃求  
 爲蜀郡太守。〔『三國志』卷一〇荀攸傳〕

とある荀攸で、陽球と同じ二千石の太守に就いているのである。

このように、下は縣長から上は郡國の守相まで、高第に察舉された者の就く官は必ずしも侍御史に限らなかったようであるが、侍御史の定員が一名であつたことからすれば、このようなことはあり得ると考えられ、中でも張馴や脂習の場合は侍御史と同秩の官に就いたのであるから特に問題はないであろう。ここで問題となるのは、その他の五名が就いた縣長や郡國の守相・騎都尉といった官であり、高第に察舉された者は侍御史に就くのが一般的であつたことからすれば、これらの官は高第に察舉された者の中では例外に屬する官である。しかし、公府からの察舉科目は表Ⅱに示したとおり、高第のみではなく多岐にわたるから、これらの官については、高第に察舉された者のみに限らず、幅廣い察舉例の中から解決していくべき問題であると考ええる。そこで次に、高第に限らず公府から察舉された者の初任官がどのような官であつたのかを見るために、表Ⅳとしてその狀況を示しておこう。

表Ⅳを見ると、高第に察舉された者の中では例外に屬する縣長や郡國の守相などに就いている者も少なからずおり、特に縣長については後漢

初期からその例があるのである。そこで、郡國の守相など官秩が極端に高いものについてはしばらくおくとして、縣長について少し検討してみよう。

縣長は縣令が置かれる縣よりも小規模な縣に置かれる長官であり、その秩は、公府の掾屬とさほど差のない四百石ないし三百石と低いものの、職掌からいえば、縣令と何らかわらないことはいうまでもない。また、縣令となった者について見ると、後漢時代には前漢時代のように三輔の縣令に就くとは限らず、三輔以外のさまざまな地方の縣令となっているのである。このことからすれば、後漢時代には、公府から察舉されて直ちに縣の長官として轉出する場合、秩の高低に關係なく、縣令も縣長も一樣に取り扱い、「四科之辟」にある縣令への轉出を保證しようとしたものと考えられるのである。このように考えて改めて表Ⅳを見ると、公府の掾屬が察舉されて最初に就く官は、一般に中央では侍御史、地方では縣の長官である令長であるといえるようであり、博士への就官者がほとんどないものの、前漢以來の「四科之辟」の基準が、後漢時代を通じてなお有効性を保っていたといえるのである。そして、侍御史・博士・議郎は六百石、縣令は千石から六百石の官であり、それと同等の千石から六百石の官に就いた者を含めると、公府から察舉された者の大半が、その範圍に入る官を初任官としているのである。すなわち、公府から察舉された者の初任官は、前漢時代と同様に六百石以上千石以下の官であったのであり、それに縣長を縣令と同様にみなすならば、さらにその數は増え、初任官は限られたものとなるのである。しかし、初任官は限られたものであるといっても、一般の登用法の初任官の範圍と比べるとはるかにその範圍は多様なものであり、これは高第による定期的な察舉を確保しつつも、なお多くの察舉科目があったのとともに、辟召制が本來的に登用法ではなかったことの現われであると考えられるのである。

ところで、前に示した『文獻通考』の記事によると「驛等而升者、辟召也」とあるように、公府に辟召されて官僚となった者のその後の昇進は速かったのである。これについては永田氏の詳しい考察があり、氏によると、このよう

な辟召制の昇進の有利性というのは明帝期頃からすでに見られるとするのである。また從來から辟召制によって官僚となった者のその後の官位の昇進が速かったことを物語る史料として取り上げられ、また『文獻通考』の記事もこれに依ったと思われる史料として、『北堂書鈔』卷六八設官部に引く崔寔の『政論』がある。それによると、

三府掾屬、及其取官、又多超卓、或期月而長州郡、或數年而至公卿。

とあり、公府の掾屬が察舉されて一旦官僚となると、一月で州郡の長官となったり、あるいは數年で三公や九卿に至るというのであり、このような異常ともいえる昇進の速い例については、永田氏が舉げた例には見られない。しかし今回改めて辟召制についてその初任官を中心に見てみると、察舉後の一般的初任官である六百石から千石をはるかにうわまわる二千石の太守に就官する例が、表Ⅳに示したように安帝期にはじめて見られ、靈帝獻帝期に太守や比二千石以上の官に就いた例が散見されるのである。そして、この狀況を説明する史料として、『後漢書』志二四百官志太尉掾屬の條の注に引く應劭の『漢官儀』に、

謁者任輕、多放情態。順帝改用公解府掾有清名威重者、遷超牧守。

とあり、從來公府の掾屬が察舉後に就く官の一つであった謁者の職責が軽いことから、順帝の時に、公府の掾屬の中で特に優秀な者については謁者を経ずに直接郡國の守相に就けることを制度的に認めたのである。とすれば、崔寔の言うような異常とも思える昇進の速さというのは、この頃から現われるものと考えられるのである。

すなわち、公府に辟召されて官僚となった者の昇進は、孝廉によって官僚となった者よりも速かったが、それは前に見たように、掾屬は三公の政治的ブレンとして政府の政策決定に重要な役割を擔っていたとされるような、いわば官僚候補者の中でもエリートであったからであると考えられる。しかも彼らの就く初任官は孝廉の場合よりもはるかに高い六百石から千石の官で、その出發點から孝廉と辟召制とは異なっており、昇進の速さの差異というのは、これによるものと考えられるのである。ところが、このように將來がある程度保證されていた公府の掾屬たちの間に

も後漢後期になると、何らかの政治的状況の變化——あるいは孝廉と同様に、不正等によって掾屬の轉出していく官位が不足していたのかもしれない——によって不滿が高まり、そこで掾屬から直接郡國の守相に轉出していくコースが新たに開かれ、表Ⅳに見えるような状況が現われてくるものと考えられるのである。とすれば、このような昇進の速さというのも、辟召制が後漢時代になって盛んに行われるようになる積極的な要因とは考えにくくなるのであり、高第による察舉の確立が、後漢時代における辟召制盛行の一つの大きな要因になったと考えられるのである。

## おわりに

從來、漢代の辟召制についての研究は、後漢時代を中心に行われてきたが、その理由は、この時代から辟召制に「辟」字が一般的に用いられるようになるからである。しかし、今回「辟」字にとらわれず、手續きとして一般にいわれる辟召制の内容と同様のものを辟召制とみなした場合、前漢時代にも辟召制は盛んに行われていたことが確認できた。このことは、從來いわれているような、豪族彈壓政策の終息に伴う豪族勢力の伸長や孝廉のいきづまり、あるいは周制の復活という點では、後漢時代における辟召制盛行の要因を十分には説明できないことを物語るものであり、さらに前漢時代にも辟召制が盛んに行われていた事實は、後漢時代になってはじめて盛んに行われるようになることを考える方を、全面的に改めなくてはならなくなるのである。しかし改めて表Ⅰを見ると、確かに辟召制は前漢時代の早い時期から見られるものの、極端にその例が多くなるのは、やはり成帝期である。とすれば、この頃に辟召制が盛んに行われるようになる要因が求められるものと考えられるのであり、そこで私はそれを、辟召制自體の制度的内容の變質あるいは發展という點に焦點をあてて考察してきたのである。このように考察した結果は、以下のようにまとめることができるであろう。

前漢時代の辟召制は、「辟召→察舉」という形態をとりまた初任官についても後漢時代と同様なのであって、一應

後漢時代の辟召制と同様の内容は持つものの、それは定期的に行われるようになっておらず、未だ十分には準登用法としての性格を帯びていなかったと考えられる。換言すれば、前漢時代の辟召制は、その制度本来の内容である屬吏任用の制度という性格を色濃く残していたといえるのである。ところが後漢時代になると、公府が所屬の掾屬の中から毎年一定数の者を高第や茂才によって察舉するという、定期的な察舉權が確立したことによって、「辟召↓（高第等による）察舉」というコースが恆常化してくるのである。このように、後漢時代になると辟召制は、準登用法としての性格を強く持つようになり、登用法體系に深く割り込んでくるのである。すなわち、漢代の辟召制は、前漢時代における屬吏任用の制度から後漢時代における準登用法としての地位へと、制度的に變質・發展するのである。このような辟召制の制度的な變質・發展の過程で現われてくるのが「辟」字である。それは制度の變質・發展の過程においてもその過渡的状況が見られると考えられ、それが「辟」字と他の辟召制を意味する「請」「署」「除」などの語との混同として現われてくると考えられるからである。そしてこの間に次第に公府による辟召によって官僚となるコースが確保されるようになって、後漢時代に至って高第によって毎年相當数の者を察舉するという、準登用法としての辟召制が確立したものと考えられるのである。

ところで、このように辟召制が變質・發展し、準登用法として確立してくる背景には、當然社會的な條件が考えられるが、ここでは、官僚制の面から考えてみると、三公が政治の實權から乖離して、三公府が人材供給のセンター化したことが挙げられよう。すなわち、『後漢書』傳三九仲長統傳に引く彼の『昌言』法誠篇に、

光武皇帝愠數世之失權、忿彊臣之竊命、矯枉過直、政不任下、雖置三公、事歸臺閣。自此以來、三公之職、備員而已。然有不理、猶加譴責。

とあるように、光武帝は前世の政治にかんがみ、政治の實權を三公から奪いとり、尙書（臺閣）に移したのであり、その結果、三公は名ばかりの名譽職となり政治からは浮いた存在となるのである。そうなると、三公府に辟召によっ

て集まってきた掾屬たちは、そこでは必ずしも彼らの實力を發揮することはできなくなり、實力を發揮するためには、必然的に所屬の公府から察舉されて官僚となるほかになるのである。これは三公に限らず、常設官ではない太傅や大將軍についても同様のことがいえよう。

このような状況下で、高第や茂才、特に高第によって毎年相當數の掾屬を官僚に察舉する察舉權が公府に與えられたとすれば、必然的に公府は中央政府への人材供給のセンターとならざるを得なくなるのである。それとともに、前漢時代には九卿層による辟召の事例も散見されたものが、後漢時代には九卿層による辟召の事例は見られるものの、そこから察舉された例はほとんど見られなくなるのである。前漢時代の九卿層による辟召の事例の中には『漢書』卷七十一于定國傳に、

補廷尉史、以選與御史中丞從事治反者獄、以材高舉侍御史。

とある于定國の場合のように、公府による辟召と同様の「辟召↓察舉」という準登用法としての辟召制の形態をとるものもあったのである。それが後漢時代に見られなくなるのは、九卿層の辟召權が消失したことを物語るものではなく、辟召から察舉によって官僚となるコースが、政治の實權から乖離して人材供給のセンターとなった公府に集中してきたことを物語るのである。だからこそ、『後漢書』傳四四楊震傳に見えるように、九卿層が自己の近親者を辟召によって官僚としようとする場合、三公に辟召を依頼しなければならないような状況が現われてくるものと考える。<sup>⑤</sup>すなわち、後漢初期の光武帝以後における三公府の人材供給のセンター化によって、前漢末から後漢初期にかけて屬吏任用の制度から準登用法へと内容を變質させてきた公府による辟召のみが、登用法體系と密接な關係を持ち盛んに行なわれるようになるのである。なお、後漢時代に三公が政治的實權から乖離してくることにについては、前漢末成帝期における三公制の成立と何らかの關係があり、それが「辟」字の登場となって現われてくるものと考えられる。<sup>⑥</sup>

辟召制は、本來屬吏を任用する制度であり、登用法とは關係のない制度であつた。そしてそれは前漢初期から行わ

れ、辟召權はいずれの官廳の長官にもあったのである。これが廣義の辟召制である。ところが、その中でも特に公府による辟召、すなわち狹義の辟召制の場合、所屬の掾屬の秩が下級官僚である郎官と大差のないものであったことによつて登用法と密接に關連するようになる。これによつて公府による辟召は、次第に所屬の掾屬を官僚として送り出すコースを確保するようになり、それとともに新たに辟召制に「辟」字を用いるようになる。そして後漢時代に至つて、高第による定期的な察舉權を獲得し、さらに三公府の人材供給のセンター化という狀況が加わつて、「辟召↓（高第等による）察舉」という過程を確立した辟召制は、一種の登用法の如き存在となるのである。しかし、登用法と本來性格を異にする辟召制は、高第による察舉によつて掾屬を侍御史に就けるコースは獲得したもの、なお完全には登用法としての地位を獲得できなかった。これが、あくまでも準登用法として存在した漢代辟召制の性格なのである。

註

- ① 漢代の官吏登用法については多くの研究があるが、特に兩漢にわたつて登用法を體系的に取り扱つた研究としては、  
一、永田英正「漢代の選舉と官僚階級」《『東方學報』〔京都〕四一、一九七〇年》  
二、左益實・劉克宗「兩漢的選舉制度與門閥世族的形成」《『中國古代史論叢』七、一九八三年》  
三、黃留珠『秦漢仕進制度』（西北大學出版社、一九八五年）  
などがある。
- ② 「後漢時代の官吏登用制『辟召』について」（『歷史學研究』一七八、一九五四年）。
- ③ 「漢魏の辟召制研究——故吏問題の再檢討によせて——」（『長史學』三、一九五九年）。
- ④ 「後漢における就官の拒絶と棄官について——『徵召・辟召』を中心として——」（中國古代史研究會編『中國古代史研究』二所收、吉川弘文館、一九六五年）。
- ⑤ 「後漢の辟召制度——その有資格者の範圍をめぐつて——」（『史觀』一一七、一九八七年。のち同氏『漢代官吏登用制度の研究』第三章第三節所收、創文社、一九八八年）。
- ⑥ 註①の永田前掲論文、及び「後漢の三公にみられる起家と出自について」（『東洋史研究』二四—三、一九六五年）。
- ⑦ 註①の黃前掲書。
- ⑧ 註②の五井前掲論文。



⑨ 註①、⑥の永田前掲論文。

⑩ 「後漢の官吏登用法に關する二、三の問題」(『佛教大學大學院研究紀要』一五、一九八七年)。この拙稿でも辟召制についてかなりの紙數を費やしたが、特に今回の論考と直接關係するのは、一一三—一四頁と二三四頁の註②である。

⑪ 註⑤の福井前掲書、二一八頁。

⑫ 註②の五井前掲論文、二二頁。

⑬ 大庭脩「漢代における功次による昇進について」(『東洋史研究』一一三、一九五三年。のち同氏『秦漢法制史の研究』第四篇第六章所收、創文社、一九八二年)を参照。

⑭ 漢代の登用法の制度内容の規定については、註⑬の大庭前掲論文、及び註①、⑥の永田前掲論文を参照。

なお、註⑤の福井前掲書において、福井氏から私の前稿に對して「いわゆる州郡の禮請についてはほとんど顧慮していない」(二一八頁)との批判をうけた。この氏の批判に答えるならば、本文で述べた如く私が登用法という場合、原則的には百石以下の屬吏層を二百石以上の官僚に登用する場合に適用される制度をいうのである。従つて、福井氏のいう「州郡の禮請」というのは、百石以下の屬吏を任用する制度であり、私はこれを登用法とはみなさず屬吏任用の制度とみなす。そして後に述べる如く、この「州郡の禮請」とはまさしく辟召制のことをいうのである。そこで、前述のように主に登用法の性格の如何を問題とする場合、基本的に州郡による禮請というのは、分析の範圍外に置いて何ら差支えないも

のと考え、取り扱わなかった。

しかし、州郡による禮請を全く無視しているわけではなく、特に孝廉の問題を取り扱う場合には、地方郡縣における屬吏任用の制度に對する再検討を行わなければならないと考える。何故ならば、漢代に登用法が本格的に始動した武帝期以後において、孝廉は最も地方社會に密着した制度であり、地方社會と中央政府との間をつなぐ人材供給の最も太いパイプであつたと考えられるからである。この問題については、稿を改めて検討しなければならないと考えている。

⑮ 各登用法についての概略は、註⑩の拙稿一二二頁を参照していただきたい。なお、漢代の登用法に關する研究については、註①の黃前掲書の附録二「1924—1984年國內外關於秦漢仕進制度問題重要論文目錄」、及び註⑤の福井前掲書の卷末に付す「主要文獻目錄——一九二〇—八七年」に網羅的に收集されている。

⑯ 本稿でいう屬吏とは、一般に胥吏と呼ばれる層を指すが、具體的には『後漢書』百官志にいう次のようなものを指す。

まず三公をはじめとする公府では掾屬・令史・御屬、その他の中央諸官廳では百官志の注に引く『漢官』で「員吏」とする層を指す。また地方諸官廳については、州では治中從事(功曹從事)以下の從事史・假佐、郡縣では功曹以下の諸曹掾史を指す。

⑰ 註①、⑥の永田前掲論文を参照。

⑱ 矢野氏は、後掲註⑨に引く『後漢書』百官志太尉掾屬の條

や『漢書』云敞傳の記事などをもとにして、「據屬辟召の性格が公的なものであったことはいうまでもない」から、「辟召制は元來公的性格をもつ選舉」であったとする（註③の矢野前掲論文、三頁）。確かに辟召制は政府から認められた公的な屬吏任用の制度であるが、本來の制度内容が登用法と異なるのであるから、氏のように、公的な制度であるという一點をもって登用法と同一視するのは問題がある。

⑭ 辟召制の人事権を考える場合に參考になる史料として『漢書』卷九〇嚴延年傳に、次のような記事がある。

丞相・御史府徵書同日到、延年以御史書先至、詣御史府、復爲據。

この場合の「徵書」とは、辟召する者に對して公府から發せられた書類と考えられる。ここで注目すべきは、その「徵書」が丞相府と御史大夫府の兩方から同時に發せられ、嚴延年はわずかに先に到着した御史大夫府の據となつてゐることである。つまり、「徵書」が二つの異なる公府から發せられたということは、公府が據屬を辟召する場合、中央政府とは關係なく、公府獨自で辟召する人材を決定したということをも物語るのであり、公府自體に人事権がなければ、このような事態は起こり得るはずがないであらう。また、嚴延年が「徵書」が先に着いたほうの公府の據となつたということは、ある者が複数の公府から辟召される可能性があつたのであり、その場合、どの公府の據屬となるかは、被辟召者の自由意志によつて決定されたという事實が明らかとならう。

ところで、『後漢書』志二四百官志太尉據屬の條に、「或曰、漢初據吏辟、皆上言之、故有秩比命士。其所不言、則爲百石屬」とあり、公府が辟召する場合、政府に報告する建前となつており、『漢書』卷六七云敞傳には、「車騎將軍王舜高其志節、比之欒布、表奏以爲據」とあつて、報告している事實もある。しかし、人事権があくまでも公府の側にあつたとすれば、永田氏が「上言するといつても、恐らくは事後報告の形式的なものであり、辟召はほとんど召者の自由裁量にまかされ、據屬の定數の枠の中では、何の掣肘も受けることなく、自己の意のままに擧用することができるものであつた」（註①の永田前掲論文、一八八頁）と述べている如く、私もその報告は形式的なものであつたと考える。

⑮ 註⑤の福井前掲書、第四章第三節及び第四節。なお、第三節には刺史及び公府に辟召された者の一覧表が、圖表16、17として付されている。

⑯ 福井氏が辟召制をいかなる制度であると考えているかは、もう一つ詳細には理解しかねるが、「そもそも公府の據屬は、三公などの私的な屬吏の性格をもつものであつたから、あらためてこの時點で公的に察舉されなす必要があつたわけである」（註⑤の福井前掲書、四四三頁。傍點は筆者加筆）と述べていることからすれば、氏も私と同様に、辟召制は登用法とは性格を異にする屬吏任用の制度であると考えているようである。

⑰ 福井氏は、三公による辟召のみが登用法と密接な關連を持

つ理由として、從來の説に従つて、公府の掾屬の秩が州の屬吏の秩よりもかなり高かつたことを擧げてゐる。確かに私もこの點が、公府による辟召が登用法と密接な關連を持つ理由であると考ええる。しかし、福井氏のように辟召權の範圍を三公と刺史のみに限定した場合、掾屬の秩の差異の説明だけでは不十分なように感じるのであり、限られた辟召權所有者の範圍の中で、三公による辟召のみが登用法と密接な關連を持つようになるもつと積極的な説明が欲しいのである。

㉔ 福井氏が、「辟召」あるいは「辟」という語の登場をもつ辟召制の開始と考えていることは、氏が、「及〔張〕湯爲御史大夫、以寬爲掾、舉侍御史」とある兒寬〔漢書〕卷五八本傳〕や、「以選除補御史掾、舉侍御史」とある嚴延年（同右卷九〇本傳）の例を擧げて、

公府の掾吏から侍御史に轉任するのは、辟召による昇進の一定の徑路であつたから、おそらくこれら二つの記事はその原形を傳えるものであらうが、そこには具體的に辟召の二字を見出すことはできない。その記事の内容からして、前者は武帝、後者は昭帝年間の史實であることは明らかであるが、ともに辟字が使用されていないことから推定すると、おそらくこれら二帝間の各時代には、辟召という制度がまだ創設されていなかったと考えてよいのではなからうか（註⑤の福井前掲書、第一章第一節、一五頁。傍點は筆者加筆）。

と述べていることから明らかとならう。

㉕ 註⑤の福井前掲書、四一六～四一七頁。

參考までに、福井氏が取り上げた史料を必要な箇所を抜粹して示しておく。

太守潁川李鴻請署功曹、未不到、而州辟爲從事。（『後漢書』傳四一李恂傳）

郡請署主簿・督郵・五官掾・功曹・守金鄉長、卽家假印綬、君介心如石、不易其心、刺史嘉其高名、辟部東平泰山治中從事。（『隸釋』卷八金鄉長侯成碑）

これらの例を見てもわかるように、「請署」と「辟」とはいずれも屬吏を任用することをいうのは明らかである。

㉖ 路溫舒は九卿の一つである廷尉に辟召されたのであるが、このような例は彼のほかに、次に示す兒寬・于定國・王嘉の例がある。

兒寬——「廷尉張湯」召寬與語、乃奇其材、以爲掾。（『漢書』卷五八本傳）

于定國——定國少學法于父。父死、後定國亦爲獄吏・郡決曹、補廷尉史、以選與御史中丞從事治反者獄、以高材舉侍御史。（同右卷七一本傳）

王嘉——光祿勳于永除爲掾、察廉爲南陵丞。（同右卷八六本傳）

以上の例からすれば、註②の五井前掲論文（二四頁）で、五井氏が九卿層に辟召權がなかったとすることは誤りである。

㉗ 『後漢書』志二四官太尉掾屬の條に、其後皆自辟除、故通爲百石云。

とあり、同右志二七百官志司隸校尉の條に、

皆州自辟除、故通爲百石云。

とある。

② 從來の全ての研究が、「辟」字を重視して辟召制を考えていたわけではない。例えば、永田氏は「辟」字にとらわれずに前漢時代に公府に辟召された例を十數例挙げ、「前漢でもかなり盛んに辟召の行われていたことが知られる」(註①の永田前掲論文、一六九頁)とし、黃留珠氏も同様の例を數例挙げてゐる(註①の黃前掲書、二〇一頁)。このように兩氏は、辟召制を手續きを中心に考えているようであり、その指摘は示唆に富む。しかし、永田氏の場合は、「しかし辟召が官吏登用の上で大きな比重を占めるようになるのは後漢に入つてからのこと」(同右)であるとして、後漢時代の辟召制を中心に考えて、前漢時代と後漢時代の辟召制の制度的變遷を明らかにし得ておらず、また黃氏は辟召制の制度内容を具體的に説明していないのである。兩氏の研究は、このように多少の問題を残しているが、私の辟召制理解に大いに參考となり、今回の論考は兩氏の研究に依るところが多い。ここに改めて兩氏に謝意を表する。

③ 註⑤の福井前掲書、四三三頁。氏は「北軍中候のみは例外として辟召の資格をもっていた」と述べている。

④ 北軍中候については、濱口重國「光武帝の軍備縮小と其の影響」(『秦漢隋唐史の研究』上巻所收、東京大學出版會、一九六六年)、及び大庭脩「漢の中郎將・校尉と魏の率善中郎

將・率善校尉」(註⑬の大庭前掲書、第四篇第三章所收)を参照。

⑤ 『漢書』卷一九百官公卿表下によると、于定國が丞相の地位にあったのは、宣帝末の甘露三年(前五二)五月から元帝初めの永光元年(前四三)十一月までの八年間であり、刺史に屬吏を置くことが決定されたのは、元帝の即位した黃龍元年(前四九)二月から永光元年十一月までの間と考えられる。

⑥ 應劭の『漢官儀』によると、刺史に屬吏が置かれるのは元帝期のことと考えられるが、それ以前にも刺史に屬吏が存在したと思われる記事が二例ほど見られる。

まず、『漢書』卷七四丙吉傳に、

治律令、爲魯獄史。積功勞、稍遷至廷尉右監。坐法失官、

歸爲州從事。武帝末、巫蠱事起……。

とあり、丙吉は武帝期に州の從事となっており、また『漢書』卷七六趙廣漢傳に、

少爲郡吏・州從事、以廉絮通敏下士爲名。(中略)會昭帝

崩……。

とあり、趙廣漢は武帝末から昭帝期にかけての間に州の從事となつてゐるのである。この事實からすると、元帝期以前にも刺史に屬吏が存在したと考えられるのであるが、『漢官儀』の記事を尊重し、右の二例について考えると、以下のようになる。

武帝の元封三年に置かれた刺史は、當初一定の治所を持た

ず年一回所管の州を巡察するだけであつたが、その巡察のときのために少數の屬吏を置いていた。それが元帝期に至つて、正式に屬吏定員を設けて州の機構を整備し、本格的に一定の治所を持つようになったのである。すなわち、元帝の時にいたつて刺史は、監察官としてよりも行政官的性格を強めるようになるのである。

⑫ 匡衡は、當時大司馬車騎將軍であつた史高に辟召されたのである。大司馬はこの時屬吏を持たなかつたのであるから、史高は車騎將軍としての資格で匡衡を辟召したものと考えられる。

⑬ 『後漢書』百官志太尉掾屬の條に、

本注曰、漢舊注、東西曹掾比四百石、餘掾比三百石、屬比二百石、故曰公府掾、比古元士三命者也。

とある。

⑭ 公府の掾屬は、身分的にはあくまでも屬吏であつて、官僚となるためには改めて公府から察舉されなければならなかつたこと、従つてその制度自體では登用法とはいえない辟召制を一種の登用法とみなす場合、次に述べるように「辟召↓（高第等による）察舉」という過程が必要であることについては、註⑩の拙稿ですでに簡単に觸れておいた。

なお、福井氏も私と同様の見解を示している。これについては、前掲註②で示した註⑤の福井前掲書からの引用部分を参照していただきたい。

⑮ 参考までに、漢代の官僚層がどのような登用法によつて最

前漢被察舉者一覽

| 時 期                       | 有傳者 | 孝廉     | 辟召     | 制科     | 茂才   | 博士弟子 | 徵召    | 察廉 | 任子   | その他 |
|---------------------------|-----|--------|--------|--------|------|------|-------|----|------|-----|
| 武昭宣元成<br>前漢末              | 18  | 0      | 0      | 3      |      | 1    | 3     | 0  | 4    | 7   |
|                           | 19  | 2      | 4      | 4      |      | 1    | 2     | 2  | 1    | 3   |
|                           | 27  | 3      | 1      | 1      |      | 3    | 5     | 1  | 9    | 4   |
|                           | 12  | 4      | 2      | 0      |      | 0    | 2     | 2  | 1    | 1   |
|                           | 29  | 3      | 7      | 2      |      | 4    | 3     | 1  | 7    | 2   |
|                           | 31  | 1      | 12( 6) | 6( 1)  |      | 0    | 9(3)  | 0  | 5    | 1   |
| 光武<br>明章和安順<br>桓靈獻<br>不 明 | 42  | 14( 2) | 13( 6) | 0( 0)  | 1(0) | 0    | 16(2) | 0  | 3(0) | 4   |
|                           | 26  | 8( 0)  | 11( 2) | 0( 0)  | 0(0) | 0    | 5(2)  | 0  | 3(0) | 1   |
|                           | 20  | 9( 0)  | 6( 2)  | 4( 2)  | 0(0) | 0    | 3(1)  | 0  | 0(0) | 2   |
|                           | 18  | 6( 1)  | 6( 2)  | 3( 2)  | 1(0) | 0    | 5(0)  | 0  | 2(0) | 1   |
|                           | 41  | 13( 1) | 18( 6) | 4( 2)  | 3(1) | 0    | 10(1) | 0  | 1(1) | 2   |
|                           | 28  | 19( 3) | 15( 6) | 6( 3)  | 3(2) | 0    | 4(3)  | 0  | 0(0) | 0   |
|                           | 69  | 33( 9) | 30(18) | 18(11) | 6(5) | 0    | 15(9) | 0  | 4(1) | 3   |
|                           | 88  | 44(12) | 41(17) | 8( 5)  | 9(7) | 0    | 14(5) | 0  | 2(0) | 5   |
|                           | 80  | 21( 3) | 55( 7) | 2( 2)  | 7(4) | 0    | 5(3)  | 0  | 0(0) | 6   |
|                           | 6   | 3( 2)  | 3( 3)  | 1( 1)  | 2(0) | 0    | 1(1)  | 0  | 0(0) | 0   |

\* ( ) の數字は登用拒否者數を示す。

初に就官したのかについて、本文のような觀點に立った場合の辟召制によつて就官した者の例も含めて、孝廉や博士弟子といった定期的に人材を供給する登用法が確立した武帝期以後の状況にしばつて見てみると、その結果は前頁の表のようになった。

この表を見てまず氣付くことは、前漢時代には定期的な登用法である孝廉や博士弟子によつて就官した者が少なく、徵召・任子あるいは辟召制によつて就官した者が、實に有傳者の過半数を占めていることである。辟召制については本文中で述べるとして、徵召や任子といった登用法は、漢代に限定してもその初期から存在した登用法であつて、特に任子は高級官僚の子弟を官に就ける世襲的な登用法である。このような状況からすると、一應武帝期以後には定期的に人材を察舉する登用法が設けられるものの、前漢時代には未だ十分には定着しておらず、武帝期以後における登用法體系の中で、なおそれ以前の状況を色濃く残していたといえるであらう。一方、後漢時代になると、孝廉によつて就官した者が壓倒的に多くなるのに對して、任子による就官者が急に少なくなる。また徵召は、登用拒否の風潮が強まる中で、登用拒否者を就官させるための最終手段となり、その内容が變質するのである（註⑩の拙稿参照）。すなわち、制度的な面から見ると、前漢武帝期に成立した登用法體系は、後漢時代になつてはじめて、有能な人材を定期的に供給する制度として確立したものと考えられるのである。しかし、一旦確立したかに見えた

登用法體系は、後漢時代における外戚・宦官あるいは豪族などによる不正という外的要因によつて崩壊し、それとともに時代は後漢帝國から三國の鼎立へと推移する。そして魏では新たな登用法である九品官人法が成立するのである。

③⑤ 本文では、同一人物が數回にわたつて辟召された例はそれぞれ一回と數えるとしたが、それは原則であつて例外もある。それは、趙禹（№1）・蕭由（№16）・孫寶（№18）・云敞（№31）であり、彼らはそれぞれ二度にわたつて公府に辟召されたにもかかわらず、表1では一度として見ている。その理由は、辟召制を登用法に準ずる制度として考える場合、辟召のみでは不完全で、その後察舉されてはじめて準登用法としての辟召制と考えるからである。つまり、私は準登用法としての辟召制を考える場合、辟召された事實とともに、就官したか否かを重要なキーポイントとして考えているのである。従つて、彼らの場合は、異なる公府に連續して辟召されたり（趙禹・蕭由）、一度掾屬のままで公府を去り、のち再び公府に辟召されたして（孫寶・云敞）、その後に就官しているのであり、このような場合は一度として數えた。また、同様の理由で、嚴延年や鮑宣の場合は、辟召されて就官したのちに官を去り、その後再び辟召されたのであるから、それを一度として數えた。

③⑦ 史料で最初に確認できる辟召制の例である趙禹の場合、「積勞、遷爲御史」とあつて、彼は明らかに察舉によらず功次によつて昇進しているのである。その他、功次による昇進

を表わすと考えられる「遷」がつくものが数例があり（田延年・蕭由・蕭育）、辟召制の場合必ずしも察舉によらず功次によって昇進することも可能であったようである。この他、「三遷して漁陽都尉となった」郭伋や、「一年間で三遷して御史となった」杜詩の例も、功次によって昇進した例とも考えられ、後漢時代にもこのように「數遷爲……」とする例がある。掾屬の身分や辟召後の察舉例が多いことから考えると、數遷の場合はこの間に察舉の過程が省略されているものと考えられる。そして數遷の間に察舉があったと考ええると、「遷」とのみある例は、管見の及ぶ限り、前漢時代の數例と後漢末に一部見られるのみであり、私はこの時期における掾屬の身分的不確定によって、辟召制と登用法との區分が不明確になっていたものと考ええる。

③⑧ 高第については、註⑤の福井前掲書、第二章第五節「察舉と對策の高第」を参照。

③⑨ 『後漢書』百官志太尉掾屬の條に引く『漢官目錄』に、  
建武十二年八月乙未詔書、三公舉茂才各一人、廉吏各二人。光祿歲舉茂才四行各一人、察廉吏三人。中二千石歲察廉吏各一人、廷尉・大司農各二人。將兵將軍歲察廉吏各二人。監察御史・司隸・州牧歲舉茂才各一人。

とあり、茂才・察廉については、後漢光武帝期以後に定期的に行われるようになることは明らかである。また治劇については詳しくはわからないが、定期的に行われたとする史料がないので、恐らく随時に有能な屬吏がいる場合に治劇として

察舉したものと考える。なお、治劇というのは、『漢書』卷九二陳遵傳に見えるように、本来「能治三輔劇縣」といっていたものの省略形であり、後漢時代に見られる能理劇・能案劇といった察舉科目も治劇のことである。

④① 縣令となった者の赴任した縣の所在地を『漢書』卷二八地理志によって見ると、以下のようになる。

平陵（嚴延年）——右扶風  
好時（嚴延年・蕭咸）——右扶風  
長陵（何並）——左馮翊  
櫟陽（朱博）——左馮翊  
郁夷（陳遵）——右扶風  
陽平（李章）——東郡

\*（ ）内は、縣令となった者の名である。

以上のように、陽平令となった李章以外は、全て三輔の縣令となっているのである。なお、李章は後漢時代に入ってから縣令となっており、後述のように後漢時代に入ると必ずしも三輔の縣令に就くとは限らないようになるのである。

④② 「雖」は、『太平御覽』卷二〇三職官部所引の『漢舊儀』によって補った。

④③ 『藝文類聚』卷四五所引の『漢舊儀』には、本文に引いた部分に續いて、次のようにある。

第一科補西曹南閣祭酒、二科補議曹、三科補四辭八奏、四科補決。

④④ 前掲註③⑨を参照していただきたい。

④④ この点については、すでに永田氏が「章帝期以後になると、辟召された者の一般的な出世コースは先の种畠の場合で、辟召→舉高第→侍御史→刺史→太守のコースがほぼ確立していったと思われる」（註①の永田前掲論文、一八九頁）と述べている。また同様の指摘は、註⑤の福井前掲書四四五頁にもある。

④⑤ 辟召後察舉された者がまず就く侍御史の官は、それほど長くとどまる官ではなかったと思われる。それは、本文で引いた蔡質の『漢儀』に、前の部分に續いて、

初稱守、滿歲拜眞。出治劇爲刺史・二千石、平遷補令。

とあり、侍御史に就くと、まず守官となり一年後眞官となるが、その後刺史・太守あるいは縣令として、地方長官に轉出していくコースができあがっていたのである。そして、『後漢書』傳二七桓典傳に、

〔桓典〕辟司徒袁隗府、舉高第、拜侍御史。（中略）在御史七年不調、後出爲郎。

とあり、桓典は七年も侍御史であつたが轉出の機會がないので、郎官（比六百石の中郎か）に就いたのであるから、これほど長く侍御史にとどまっていることは異例であつたのであろう。これらの史料と毎年高第によって侍御史となる者が多數にのぼることを考え合わせれば、孝廉に察舉された者が最初に就く郎中と同様に、侍御史もまた、高第に察舉された者が轉出する官が見つかるまで待機する官となつたと考えられるのである。

④⑥ 縣の令長については、『後漢書』志二八百官志に、  
每縣・邑・道、大者置令一人、千石、其次置長、四百石、小者置長、三百石、侯國之相、秩次亦如之。本注曰、皆掌治民、顯善勸義、禁姦罰惡、理訟平賊、恤民時務、秋冬集課、上計於所屬郡國。  
とある。

④⑦ 左の表は、辟召後公府から察舉されて縣令に就官した者が、赴任した縣名と所屬郡國の一覽である。これを見ると、後漢時代には必ずしも三輔の縣令に就くとは限らなかったことが明らかとなる。

| 時期 | 氏 | 名 | 縣 | 郡 | 國 | 出典   |
|----|---|---|---|---|---|------|
| 光武 | 周 | 澤 | 中 | 弘 | 農 | 傳79下 |
| 章  | 魯 | 恭 | 〃 | 河 | 南 | 傳15  |
| 安  | 繆 | 彤 | 平 | 陳 | 〃 | 傳71  |
| 順  | 周 | 舉 | 高 | 北 | 海 | 傳51  |
| 〃  | 李 | 咸 | 密 | 陳 | 留 | 傳34注 |
| 桓  | 楊 | 賜 | 陳 | 〃 | 〃 | 傳44  |
| 〃  | 魏 | 朗 | 彭 | 北 | 〃 | 傳57  |
| 〃  | 臧 | 旻 | 奴 | 中 | 城 | 卷7注  |
| 靈  | 恢 | 朗 | 盧 | 東 | 山 | 傳66  |
| 〃  | 司 | 朗 | 不 | 河 | 南 | 卷15  |
| 〃  | 蒯 | 越 | 成 | 汝 | 南 | 卷6注  |
| 〃  | 馬 | 越 | 汝 | 河 | 南 | 卷31  |
| 〃  | 劉 | 焉 | 頴 | 河 | 南 | 卷26  |
| 〃  | 田 | 放 | 頴 | 左 | 馮 | 卷14  |
| 〃  | 放 | 豫 | 陽 | 左 | 馮 | 卷14  |



|     |     |     |     |     |      |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 獻   | 王   | 徐   | 陳   | 滿   | 王    | 時   | 何   | 陳   | 張   | 衛   |
| 脩   | 宣   | 矯   | 龍   | 觀   | 苗    | 夔   | 羣   | 既   | 張   | 衛   |
| 即   | 東   | 相   | 許   | 高   | 壽    | 城   | 蕭   | 新   | 茂   | 陵   |
| 墨   | 縉   | 縉   | 唐   | 春   | 父    | 南   | 沛   | 兆   | 扶   | 風   |
| 北   | 山   | 沛   | 額   | 平   | 九    | 汝   | 京   | 京   | 右   | 扶   |
| 海   | 陽   | 陽   | 川   | 原   | 江    | 南   | 兆   | 兆   | 扶   | 風   |
| 卷11 | 卷22 | 卷22 | 卷26 | 卷24 | 卷23注 | 卷12 | 卷22 | 卷15 | 卷21 | 卷21 |

\* 出典の欄で、傳とあるものは『後漢書』、卷とあるものは『三國志』である。

④8 註⑥の永田前掲論文、六七～六八頁。

④9 このような昇進の速さというのは、いつごろからはじまるのであろうか。永田氏によると、明帝期頃にはすでに孝廉よりも昇進は速かったとしているが（註①の永田前掲論文）、私はもう少し早く光武帝期からすでに昇進は速かったように考える。それは、本文に引いた『漢官儀』に、

舊河隄謁者、世祖以三府掾屬爲謁者領之、遷超御史中丞・刺史、或爲小郡。

とあり、光武帝期に公府の掾屬で謁者となった者について、御史中丞・刺史や太守へと遷超していくコースが定められているからであり、この頃から辟召制における昇進の有利性が現われてくるものと考えられる。

⑤0 黄氏は、三公以外の中央官廳の長官による辟召の例が史料

ではほとんど見られない理由を、次のように述べている。

兩漢では三公以外の九卿及びその他中央長官もまた屬吏を辟除することができた。「しかし」當時の人々が公府の辟除を上としたことによつて、英才俊士たちは相争つて「公府の辟除を」たよつた。だから史籍に記録されているのは、大多數が公府の辟除であり、九卿等の中央長官の辟除の實例はほとんど見出せないのである（註①の黄氏前掲書、二〇三頁。「」は筆者加筆）。

なお、前漢時代における九卿による辟召の例は、註⑤に示しておいた。

⑤1 『後漢書』楊震傳に、

延光二年、代劉愷爲太尉。帝舅大鴻臚耿寶薦中常侍李閭兄於震、震不從。寶乃自往候震曰、李常侍國家所重、欲令公辟其兄、寶唯傳上意耳。震曰、如朝廷欲令三府辟召、故宜有尙書勅。遂拒不許、寶大恨而去。皇后兄執金吾閭顯亦薦所親厚於震、震又不從。司空劉授聞之、即辟此二人、旬日中皆見拔擢。

とある。

⑤2 私は、三公制の導入そのものが三公權力の削減を意味するものではないかと考えている。また現在私は、公府による辟召については、領尙書事や錄尙書事の問題との關連で考えていくことができるのではないかと考えている。領尙書事や錄尙書事については、現在なお明確な答えは出されていないが、私はこれらの權限の中には、官僚の任免權も含まれてい

たのではないかと考えており、今回表一で見たように、辟召制が史料で見出せるようになるのが、領尙書事が出現する時期とほぼ一致し、特に昭帝期の辟召の例は霍光によるものであることに注目したい。つまり、領尙書事あるいは録尙書事として官僚の人事権を握った公府の長官が、自身で辟召した属吏を自らの権限で官僚として送り出し、官僚機構内部に勢力を擴大していき、これとともに辟召制が盛んに行われるようになると考えられるのである。これについては、稿を改めて考察したい。

### 〔補論〕

以上によって、なお不十分な點を残しつつも現時點での私の漢代辟召制についての考えは論じ盡くした。しかし私の前稿に對しては、福井氏からさらに次の二點について批判をうけた（福井前掲書、二一七～二一八頁）。

一、私が前稿の表Ⅱ（拙稿、一一七～一二二頁）で登用拒否者として挙げた一〇二名の中で、「徵辟や制科に指名される以前に、孝廉・茂才の常科に挙げられ」ながら、それを拒否した者は全體の四割強（一〇二名中四二名）となり、正史では「最初に適用された選舉科目を省略する筆法が少なくない」ことからすれば、四割強という「數値自體が相當の比重を示すもの」である。

二、「いわゆる州郡の禮請についてほとんど顧慮していない」。

この二點については本論とは直接關連しなかつたので、補論の形で福井氏の批判に答えたいと思うが、二については既に註④で簡単に觸れておいたのでそちらを参照していただくとして、一について私の考えを述べておこう。

第一に、福井氏が孝廉と茂才とを常科として一つにまとめこれを合計し、登用拒否者全體に占める孝廉と茂才の拒否者の割合が高いとしているのはいかがなものであろうか。

福井氏も認めているごとく、茂才は孝廉より一段高い登用法なのである（福井前掲書、一〇九頁）。このことは、孝廉と茂才の各登用法によって就く初任官によってわかる。そして福井氏がその著書全體を通じて確認していることであるが、官秩による官僚層の區分からすると、比六百石と四百石の官秩の間に一線を畫すものが存在したのである。すなわち、孝廉による初任官は比三百石の郎中であつたのに對し、茂才の初任官は千石から六百石の縣令というのが一般的であつたから、同じ常科といつてもその登用法としての性格は明らかに異なっているのである。そして茂才はむしろ、その初任官を同じくする制科や徵召、あるいは本論で明らかにした準登用法として確立した辟召制と性格を同じくする登用法であるといえるのである。とすれば、孝廉と茂才とを常科として一つにまとめ、登用拒否者全體に占める割合を考えるのは問題があるのではないだろうか。

第二に、福井氏が、正史では最初に適用された登用科目を省略する場合があるから、史料に残る孝廉や茂才を拒否した者が拒否者全體の四割強を占めるということは、實際にはそれらを

拒否した者をもっと多かつたはずである、と推測しているのものがなものであろうか。

確かにそのような推測も成り立たなくはない。しかしながら、福井氏の推測を可能なものにするためには、前漢時代にも同様のことがいえなければならぬであらう。そこで前漢時代の状況を見ると、後漢時代に存在する各登用法は基本的には前漢時代にも存在しており、註⑤に掲げた表で示したように、孝廉以外の登用法によって直接登用された例は相當數にのぼるのである。そして前漢時代には成帝期以前には登用拒否の例は史料で確認できないのである。このような状況のもとで、福井氏のように、孝廉以外の登用法によって登用された者の多くがそれ以前に孝廉による察舉を拒否していたと想定するならば、従来の孝廉や登用拒否に関する研究を大きく見直さなければならなくなる。逆に、福井氏の推測が後漢時代にのみ有効であるとするならば、前漢時代には孝廉以外の登用法によって直接登用されることが可能であつたものが、何故後漢時代になると孝廉の拒否を振出として順次上位の登用法をうけていくようになったのか問題となる。

以上のことからすれば、福井氏の推測を可能とするためには、前漢末から徐々に見られるようになり特に後漢時代に顯著になる登用拒否が、何故可能になったのかという登用拒否の論理を、國家權力との關連をも含めて従来の研究以上に多角的な視點から解明していかなければならぬであらう。しかしそれを解明することは、不可能といえないまでも非常に困難であ

る。そして萬一解明されたとしても、史料上における適用された登用法の省略については、上のような理由も含めて、證明することは非常に困難であり、また省略を推測することは危険である。

そこで私は、『後漢書』『三國志』という正史をはじめとして、『後漢紀』『東觀漢記』『七家後漢書』などの後漢時代のいずれの史料にも記載がなく、さらに他に據るべき史料がなければ、結局その記事を信用するのが最も妥當であらうと考える。そして結果的には、以下のように多少の補強を加えて、前稿の私の考えを再び論じなければならなくなるのである。

登用拒否に焦點をあてて各登用法の性格を分析すると、孝廉は最下位に位置する登用法であり、その一段上位に茂才・辟召・制科があり、そして最上位に徵召が位置するのである。登用法の間に何故このような上下關係にも似た關係ができあがるかといえば、各登用法によって就く官が異なっていたからである。すなわち、孝廉による初任官は比三百石の郎中であるのに對して、その他の登用法による初任官はいずれも六百石以上の官であり、孝廉とその他の登用法とは初任官に格差があつたのである。そして徵召は、その初任官は六百石の議郎であるが、皇帝の權威が付加されることによって強制力を持ち、登用拒否が顯著になる後漢時代には、登用拒否者を召し出すための最終手段の登用法としての性格を帯びるようになる。各登用法がこのような性格を持ち、さらにたとえ登用を拒否したとしてもその登用に應じたものと認識されたのである。このような状

況のもとでは、孝廉よりも上位の登用法を拒否した者は、同等の初任官をもつ茂才・辟召・制科・徵召のいずれかの登用法を順次うけることになり、下位に位置する孝廉に察舉されることはなかったのである。そして孝廉を拒否した者は、必然的により高い初任官が用意されている孝廉以外の登用法が適用されることになる。しかしそこには、前漢時代の例から見ても明らかのように、上位の登用法を適用される以前にそれより下位の登用法をうけていることは、決して前提とはされなかったのである。